仙台市文化財調査報告書第234集

宮城県仙台市

郡山遺跡 XIX

——平成10年度発掘調査概報——

1999.3

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第234集

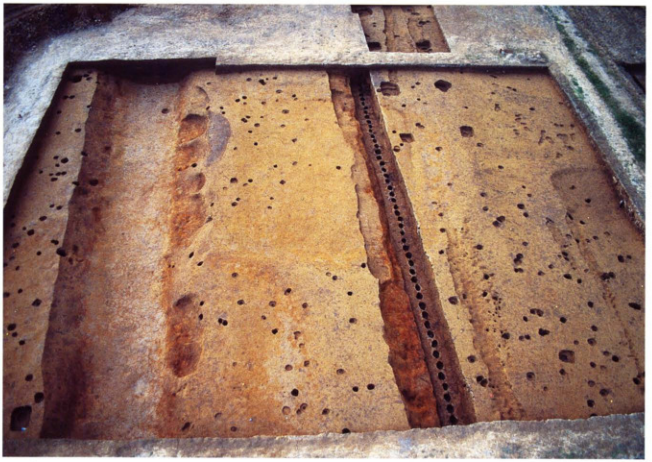
宮城県仙台市

郡山遺跡 XIX

――平成10年度発掘調査概報

1999.3

仙台市教育委員会



巻頭図版1　第121次調査区　方四町Ⅱ期官衙外郭大溝と材木列（東より）

巻頭図版２　鉄、銅関連出土遺物

序　　文

郡山遺跡の範囲確認調査も本年度は19年目を迎え、毎年数々の成果を積みあげ、東北の古代史解明に一石を投じております。このことは古代史・考古学等の識者のみならず、市民の皆様方にも御承知のことと存じます。

幻の城柵としての一端をあらわした昭和54年以来、継続的に実施してまいりました発掘調査により古代の文献に記録のない“幻の城柵”はまさに“甦る城柵”として、私たちの前にその姿を現したのです。辺境とされてきた当地方の歴史観を一変した我が国最古の地方官衙・郡山遺跡の発見は日本の考古学・古代史学界に大きな反響を巻き起こしたものと確信しております。

本年度はII期官衙の中枢部南端の様相と、郡山廃寺の範囲を明らかにすることを主目的に発掘調査を実施いたしました。その結果、これまで不明であった箇所がより明らかになり、成果が上がったものと考えております。ここに調査の記録を余すところなく報告、公開するものです。

市街化への動きが著しい郡山地区にあって、文化財の保存につきましてもより一層緊密な調整を必要とする状況にあります。そのような中にあって、継続的に調査を実施できますことは、ひとえに土地所有者の方々、地元町内会の皆様方の多くのご協力と御支援の賜物と感謝申し上げる次第であります。

先人の残した貴重な文化遺産をつぎの世代に継承していくことは、行政によってのみ成し得るものではなく、市民一人一人の先人への深い理解と子孫への広い展望なくしては成し得ないものであります。

これからも文化財保護への深いご理解と御協力をお願いするとともに、本書が文化財愛護精神高揚の一助となりますことを願ってやみません。

平成11年３月

仙台市教育委員会

教育長　小　松　弥　生

例　　言

1．本書は郡山遺跡の平成10年度範囲確認調査の概報である。

2．本調査は国庫補助事業である。

3．本概報は調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本 文 執 筆　長島榮一
遺構トレース　笘井百合子、岡まり子、大友広美
遺 物 実 測　伊勢多賀子、大友、鈴木由美、岩谷こずえ、黒田照子
遺物トレース　笘井、岡、鈴木、伊勢、大友、岩谷、黒田
遺構写真撮影　長島、髙橋綾子
遺物写真撮影　木村浩二
遺物補修復元　赤井沢千代子、黒田
図 版 作 成　長島、笘井、吉田りつ子、大友、岡
写真図版作成　木村、長島
編集は長島がこれにあたった。

4．遺構図の平面位置図は相対座標で、座標原点は任意に設置したNo.1原点（X＝0、Y＝0）とし、高さは標高値で記した。

5．文中で記した方位角は真北線を基準としている。

6．遺構略号は次のとおりで、全遺構に通し番号を付した。

SA	柱列などの掘跡	SE	井戸跡	SX	その他の遺構
SB	建　物　跡	SI	竪穴住居跡・竪穴遺構	P	ピット・小柱穴
SD	溝　　跡	SK	土　坑		

7．遺物略号は次のとおりで、各々種別毎に番号を付した。

A	縄 文 土 器	D	土師器（ロクロ使用）	G	平瓦・軒平瓦	K	石 製 品
B	弥 生 土 器	E	須 恵 器	I	陶　　器	N	金属製品
C	土師器（ロクロ不使用）	F	丸瓦・軒丸瓦	J	磁　　器	P	土 製 品

8．建物跡模式図中の記号は以下の基準により図示した。

●＝柱痕跡の検出されたもの
○＝掘り方のみ検出されたもの
◌＝他遺構との重複により検出されないもの

9．遺物実測図の網スクリーントーン張り込みは黒色処理を示している。

10．本概報の土色については「新版標準土色帳」（古山・佐藤：1970）を使用した。

11．本概報中の掘立柱建物跡の記載の中で「柱痕跡は21cmの円形で…」とあるものは、柱痕跡の直径が21cmの意である。

目　　次

序　文
例　言
Ⅰ　はじめに……1
Ⅱ　調査計画と実績……2
Ⅲ　第117次発掘調査
　1．調査経過……4
　2．発見遺構・出土遺物……5
　3．まとめ……14
Ⅳ　第118次発掘調査
　1．調査経過……17
　2．発見遺構・出土遺物……17
　3．まとめ……17
Ⅴ　第119次・第120次発掘調査
　1．調査経過……19
　2．発見遺構・出土遺物……21
　(1)　第119次調査Ａ区　(2)　第119次調査Ｂ区　(3)　第120次調査
　3．まとめ……26
Ⅵ　第121次発掘調査
　1．調査経過……27
　2．発見遺構・出土遺物……27
　3．まとめ……37
Ⅶ　第122次発掘調査
　1．調査経過……42
　2．発見遺構・出土遺物……42
　3．まとめ……43
Ⅷ　第123次発掘調査
　1．調査経過……46
　2．発見遺構・出土遺物……46
　3．まとめ……48
Ⅸ　総　括……49
　調査成果の普及と関連活動……54
　写真図版……59

Ⅰ はじめに

平成10年度は郡山遺跡範囲確認調査第４次５カ年の４年次にあたり、下記の体制で臨んだ。

調査主体　仙台市教育委員会

調査担当　仙台市教育委員会生涯学習部文化財課

文化財課　課長　佐藤憲一
管理係　係長　今井京子
主事　高橋博史
主事　佐藤直美
調査第一係　係長　田中則和
主査　木村浩二
主任　長島榮一
教諭　高橋綾子
調査第二係　係長　結城慎一
主査　篠原信彦
教諭　竹田幸司

発掘調査、整理を適正に実施するための調査指導委員会を設置し、委員を委嘱した。

委員長　佐藤　巧（東北大学工学部名誉教授　建築史）
副委員長　工藤雅樹（福島大学行政社会学部教授　考古学）
岡田茂弘（国立歴史民俗博物館教授　考古学）
桑原滋郎（宮城県教育庁文化財専門監　考古学）
白鳥良一（宮城県多賀城跡調査研究所長　考古学）
須藤　隆（東北大学文学部教授　考古学）
今泉隆雄（東北大学文学部教授　古代史）

発掘調査および遺物整理にあたり、次の方々から御協力をいただいた。

地権者　古山富士夫、佐々木宏行、田崎實、東北電力株式会社宮城支店、東北発電工業株式会社仙台事業所、斎藤捷衛、赤井沢久治、佐藤善昭

調査参加者　赤井沢サダ子、赤井沢千代子、伊勢多賀子、伊勢みつ、伊藤貞子、岩谷こずえ、大友節子、大友広美、岡まり子、尾形陽子、小嶋登喜子、小池房子、黒田照子、佐々木直子、菅井百合子、鈴木由美、高橋ヨシ子、千田あや子、牧かね子、吉田りつ子

さらに下記の諸機関の方々から適切な御教示をいただいた。

文化庁文化財保護部記念物課：文化財調査官　坂井秀弥、文化財調査官　小池伸彦、国立歴史民族博物館教授　今村峯雄、奈良国立文化財研究所　巽淳一郎、千葉大学教授　河原純之、比治山大学教授　松下正司、東北学院大学文学部助教授　佐川正敏、横浜市歴史博物館　平野卓治、株式会社日鐵テクノリサーチ　伊藤薫

II　調査計画と実績

平成10年度の発掘調査は、郡山遺跡発掘調査の第４次５カ年計画における第４年次目である。当初の第４次５カ年計画では郡山廃寺の実態を明らかにすることが主な目的となっていた。しかし昨年度に引き続きII期官衙の中枢部についても追加調査が必要であり、調査地点を新たに加えることにした。今年度は国庫補助事業である「郡山遺跡緊急範囲確認調査」として発掘調査を実施し、発掘調査費は次のような内示（総経費2,000万円、国庫補助金額1,000万円）をうけた。また仙台市内に分布する重要遺跡の調査やそれらにおける個人住宅などの小規模開発に伴う発掘調査は、「仙台平野の遺跡群」として予算を按分し実施してきたが、今回は「仙台平野の遺跡群」に該当する発掘調査が郡山遺跡内のみの予定であったため、調査成果は「郡山遺跡 XIX－平成10年度発掘調査概報」に合わせて掲載することとし、「仙台平野の遺跡群」としての報告は刊行しないこととした。それらを踏まえ以下のような実施計画を立案した。

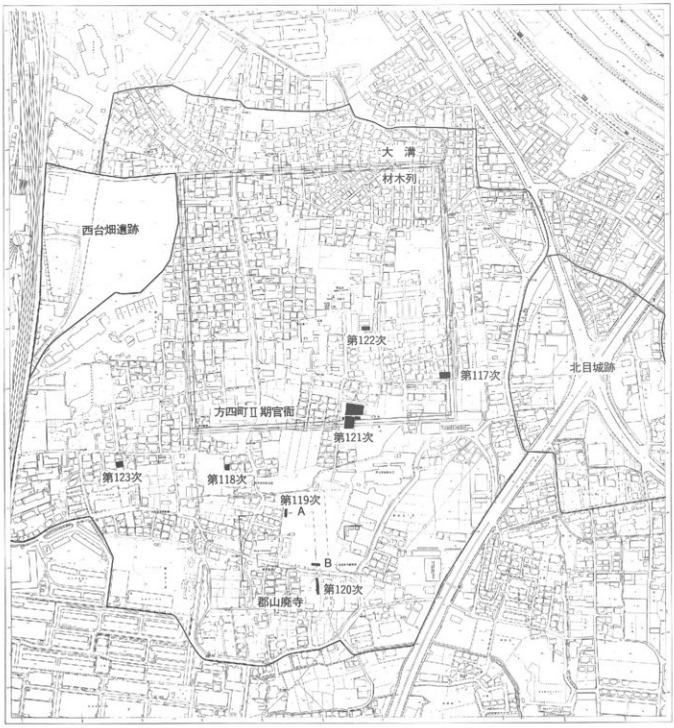
第１表　発掘調査計画表

調査次数	調査地区	調査予定面積	調査予定期間	調査原因
第117次	方四町II期官衙南東部	120㎡	４、５月	個人住宅建替え
第118次	南方官衙西地区	80㎡	５、６月	個人住宅建替え
第119次	郡山廃寺北辺、東辺	80㎡	６月	範囲確認調査
第120次	郡山廃寺東辺、南辺	100㎡	６、７月	範囲確認調査
第121次	方四町II期官衙中枢部南端	800㎡	８月～11月	範囲確認調査
第122次	方四町II期官衙中枢部南端 I期官衙中枢部	120㎡	12月	範囲確認調査
計	６地区	1,300㎡	４月～12月	

なお計画立案後に個人住宅の建替えに伴った発掘調査の実施が必要になったため、第123次調査を追加した。したがって本年度の調査概報では第117次～第123次調査までの７地区の報告を掲載する。

表２　発掘調査実績表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第117次	方四町II期官衙南東部	100㎡	４月16日～６月２日
第118次	南方官衙西地区	60㎡	５月26日～６月12日
第119次	郡山廃寺北辺、東辺	40㎡	６月22日～７月７日
第120次	郡山廃寺東辺、南辺	40㎡	７月13日～８月５日
第121次	方四町II期官衙中枢部南端	800㎡	８月17日～12月11日
第122次	方四町II期官衙中枢部南端 I期官衙中枢部	100㎡	11月６日～12月18日
第123次	I期官衙南部	20㎡	７月６日～７月13日
計	７地区	1,160㎡	４月16日～12月18日


大 溝
材木列
西台畑遺跡
第122次
第117次
北目城跡
方四町Ⅱ期官衙
第121次
第123次
第118次
第119次
A
B
第120次
郡山廃寺
0
100
200
300
400m

第１図　郡山遺跡全体図

Ⅲ　第117次発掘調査

1．調　査　経　過

第117次調査は仙台市青葉区下愛子字森下１－１県職員宿舎１－604佐々木宏行、古山富士夫氏より、仙台市太白区郡山３丁目205番２において住宅の解体、新築に伴う発掘届が平成９年11月28日付けで提出された。住宅の基礎が遺構の検出面より深く、遺構を損なうため発掘調査を実施した。なお敷地内を通過する方四町Ⅱ期官衙の外郭東辺となる材木列については、その箇所にかかる住宅の基礎構造を変更し、遺構の保存をはかった。

調査地点は方四町Ⅱ期官衙の東辺上の南部に位置している。方四町Ⅱ期官衙の南東コーナーからは北へ64～72mの地点である。この周辺には郡山遺跡内で初めての発掘調査となった昭和54年度調査区や、昭和56年の第11次調査区があり、その北に隣接している。昭和54年度調査では掘立柱建物跡15棟、竪穴住居跡２軒などの他に焼土遺構４、土坑16、溝状遺構18を検出し、漆の付着した土師器や青銅製のツマミなどが出土している。第11次調査では方四町Ⅱ期官衙の外郭東辺となる材木列と大溝を検出している。

調査地は宅地となっており、調査開始前までは住宅が建っていた。周辺の状況から畑地の上に盛土され宅地となっていると推定される。住宅の建つ部分を対象に東西11m、南北８ｍの調査区を設定し、平成10年４月16日から表土排除を実施した。現況より深さ0.5～0.6m で遺構を検出したが、周辺の調査区より遺構の数が多く調査に時間を要し、平成10年６月２日に終了した。

第２図　第117次調査区位置図

2．発見遺構・出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、材木列１列、溝跡１条、土坑６基、性格不明な遺構２、小柱穴による建物跡５棟、同じく柱列２列、ピットなどである。これらの遺構は旧耕作土（Ⅱ層）直下の基本層位第Ⅲ層ないし第Ⅳ層上面で検出されている。

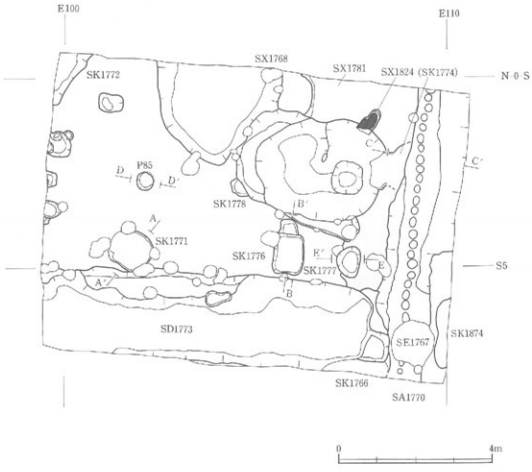
SA1770 材木列　上幅120～160cmの布掘りで、中段において幅が狭くなり60cm～110cmとなっている。その中央にほぼ一直線に直径18cm～28cmの材木痕跡が密接し、25本分の材木痕跡を検出した。検出した布掘りの総長は7.5mで、方向はN－1°－W、さらに南北方向に延びている。掘り方埋土は灰黄褐色・褐灰色粘土、褐灰色シルト質粘土などである。

遺物は掘り方埋土中より、頸部有段の土師器C－813 甕や内面に漆の付着した土師器C－823 壺（写真図版29－13）、端部にカエリのない須恵器E－420 蓋の小片、土製品P－36 羽口（写真図版30－12）、P－46 羽口片、鉄製品N－89 刀子片と漆の付着した土師器片が２点出土した。その他多量の土師器坏、甕片と少量の鉄滓が出土している。

SX1781 を切り、SK1774、SK1766 土坑、SE1767 井戸跡に切られている。

SD1773 溝跡　上幅240cm、底面幅110～170cm以上、深さ25～45cm、断面形は扁平な逆台形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、北壁には段を有する箇所があり、底面は平坦である。方向はE－3°－N で、検出した総長は９ mである。SA1770 材木列と接する溝跡の東端では幅が窄まっている。堆積土は明黄褐色・黄灰色粘土質シルトなどである。

遺物は堆積土中より、内面に漆の付着した土師器C－816壺や平行叩きの施されたG－90平瓦、並と刀身の一部



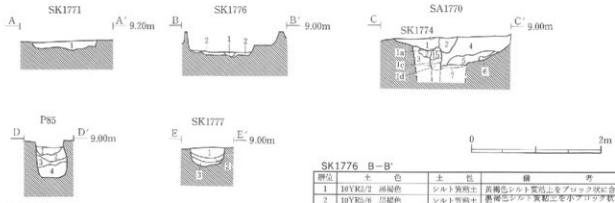
第３図　第117次調査区平面図Ａ（1/100）

のみの鉄製品N－88刀子（第7図12）が出土し、底面よりは端部にカエリのない須恵器E－415蓋（第6図13）や高台付坏片、多量の土師器の小片、少量の鉄滓が出土している。

SK1764（第11図参照）、SK1774、SK1766土坑に切られている。

SX1768　不整の楕円形の土坑が2、3基連結したような形状を呈している。検出した上面での重複は確認できなかった。西半部は南北265cm×東西320cmで、深さは30cm程である。東半部は南北260～320cm×東西370cm程で、底面の東端部がロート状に落ち込んでいる。深さは西半部は40cm、東半部は85cm、最深部のロート状の部分で約150cmとなる。西半部の堆積土は上層の1、2層が暗褐色、褐灰色粘土質シルト、それより下層が褐色、暗褐色、灰黄褐色シルトである。第5層は炭化物の堆積層である。東半部の堆積土は灰黄褐色シルト、明黄褐色粘土質シルト、褐色シルトや暗褐色、黄褐色、にぶい黄褐色粘土質シルトなどである。第2層は炭化物がきわめて多く、第8層は炭化物のみの堆積層である。第12、13層中には人頭大かそれ以上の大きさの礫が含まれていた。

遺物は西半の第1、2層からは、脚部に窓がなく、坏部内面が黒色処理された土師器C－809高坏（第6図7）、内外面に漆の付着した土師器C－812甕（写真図版29－10）、内面黒色処理された土師器C－833坏、内面に漆の付着した土師器C－835坏、C－837甕、内面に赤色の付着物の顕著なC－840トリベ（写真図版30－9－⑧）や黒色の発泡した付着物のあるC－847トリベ（写真図版30－7）、土師器の甕の底部に黒色の付着物がありトリベとして使用された土師器C－842甕（写真図版30－9－⑩）、C－843、844、845甕（写真図版30－3、4、5）、刷毛目の顕著な土師器C－851甕、体部のみの須恵器E－408平瓶、内面に漆の付着した須恵器E－412壷（第6図12）、凸面格子叩きの平瓦G－89、擦痕の顕著なK－217砥石、火熱を受けたP－40羽口（第7図7）、P－41羽口（第7図5）などが出土している。第3層から底面までは内面に漆の付着した土師器C－815壷、外面の段が不明瞭なC－818坏（第6図8）、火熱を受け変色したC－820甕（第6図2）、外面が変色し摩滅したC－819坏（第6図4）、土師器の坏の底部片をトリベとして使用した土師器C－848坏（写真図版30－8）、内面に黒色の付着物があるC－839トリベ（写真図版30－2）、擦痕の顕著なK－219砥石（7図11）、先端の欠損したK－218石鏃、火熱を受けたP－44羽口（第7図6）などが出土している。



Pit 85 D－D′

層位	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物を多量に含む。
2	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	褐色粘土質シルトをまばらに含む。
3	10YR4/4 褐色	シルト質粘土	炭化物を多量に含む。
4	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	炭化物を斑状に含む、酸化鉄を少量含む。

SK1777　E－E′

層位	土色	土性	備考
1	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	炭化物を少量含む。
2	10YR6/1 褐灰色	シルト質粘土	
3	10YR5/1 褐灰色	シルト質粘土	2層をブロック状に少量含む。

SK1771　A－A′

層位	土色	土性	備考
1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色シルトを少量ブロック状に含む。

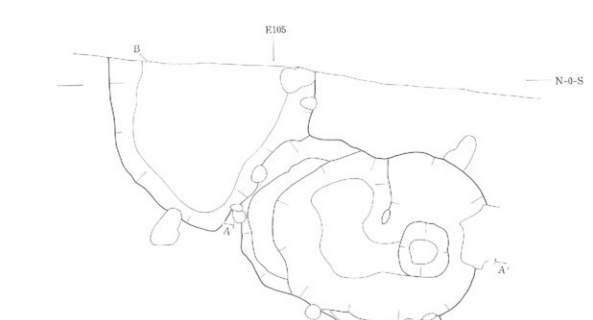
SK1776　B－B′

層位	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む。
2	10YR5/6 黒褐色	シルト質粘土	黒褐色シルト質粘土を小ブロック状に含む。

SA1770　C－C′

遺構名	層位	土色	土性	備考
SK1774	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	炭化物を斑点状に含む。以下所を含む。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	
SA1770	1a	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	
	1b	10YR4/1 褐灰色	粘土	黄色粘土を縞状に含む。
	1c	10YR4/1 褐灰色	粘土	黄色粘土を多く含む。
	1d	10YR4/1 褐灰色	粘土	
	2	10YR5/1 褐灰色	粘土	
	3	2.5Y7/6 明黄褐色	粘土質シルト	
	4	10YR6/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄・白色粘土を含む。
	5	10YR5/1 褐灰色	粘土	酸化鉄・白色粘土を多量に含む。
	6	10YR5/1 褐灰色	粘土	
	7	10YR8/4 浅黄橙色	粘土	

第4図　材木列・土坑断面図（1/60）



SX1768　西半

層位	土色	土性	備考
1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	炭化物を含む。
2	10YR6/1　褐灰色	粘土質シルト	炭化物を含む。
3	10YR4/4　褐色	シルト	褐色シルト・黄褐色シルトをブロック状に含む。
4	10YR4/4　褐色	シルト	炭化物、土器、土製品を多く含む。
5	同色	(炭化物)	焼土、土器、土製品を多く含む。
6a	10YR3/2　暗褐色	シルト	黄褐色シルトを含む。
6b	10YR4/3　灰黄褐色	シルト	黄褐色シルトを含む。

SX1768　東半

層位	土色	土性	備考
1	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	炭化物を多量に含む。
2	10YR3/4　暗褐色	シルト	炭化物を多量に含む。
3	10YR6/8　明黄褐色	粘土質シルト	灰黄褐色シルト質粘土をまばらに含む。
4	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	
5	10YR6/1　褐灰色	粘土質シルト	炭化物を全体に含む。炭の縞。
6	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	灰褐色シルト質粘土をまばらに、炭化物をブロック状に多く含む。
7a	10YR4/4　褐色	シルト	炭化物、土器と製品片、鉱滓を多量に含む。
7b	10YR4/4　褐色	シルト	炭化物を少量含む。
8	10YR12/1 黒色	(炭化物)	焼土のブロックならびに骨片、鉱滓、土器、土製品を多量に含む。
9	10YR4/6　褐色	粘土質シルト	暗褐色砂土質シルトと混じった炭化物を少量含む。
10	7.5YR2/1　黒色	粘土質シルト	骨片を多量に含む。
11	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含む。
12	10YR6/6　黄褐色	粘土質シルト	25～30cmの壁が出土。
13	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	暗褐色ﾅﾙ小ブロック状に含む。

第5図　SX1768 平・断面図 (1/60)

東半の第7層より上層からは、内面黒色処理された土師器C－810坏（第6図6）、土師器C－833坏、関東系の土師器C－814坏、胴部に丸味のある土師器C－822甕（第6図3）、外面ハケメ調整の顕著な長胴形の土師器C－824甕（第6図10）、また頸部の欠損した須恵器E－405壺（第6図11）、口径が20cmを超え、底部に回転ヘラケズリ調整の施される須恵器E－406高台付坏（第6図14）や、皿状の坏部とスリット状の細長い窓を有すると推定されるE－407高坏片、端部にカエリのあるE－409蓋片、坏部の大きさに比して高台の口径が小さいE－411高台付坏片、さらに先端部に黒色と緑色の鉱滓が付着したP－37、39羽口（第7図2、1）などが出土している。第8層の炭化物の層中からは、脚部に窓のある土師器C－821高坏（第6図9）、C－850高坏（写真図版29－5）や、端部の欠損したP－43羽口片（写真図版31－2）、また布の繊維痕跡が観察されるO－2、3漆膜（註1）などが出土している。第9層からは、外面体部下半にヘラケズリ痕跡の明瞭なC－817壺、内面に漆の付着した土師器C－836坏、トリベとして使用された内面に赤色の付着物があり片口状の注ぎ口が穿たれたC－841坏（第7図8）が出土している。第10層からは元口の部分だけ残存するP－38羽口（第7図4）、先端部に黒色と緑色のガラス質の鉱滓が付着したP－45羽口（写真図版31－4）が出土している。底面付近からは算盤玉状のハケメ調整が施されたC－811甕（第6図1）や、焼け面のあるK－226、227礫、面取りされ敲打痕跡のあるK－229礫（写真図版31－6）などの人頭大か、それ以上の大きさの礫が約20個ほど出土している。

この他に西半、東半から鉄滓、炉壁と推定される一部と密着した鉄滓などが26kg程出土している。

SX1781、1824、SK1778土坑を切り、SK1769、1774土坑に切られている。

SX1781　第IV層からの掘り込みで、平面形は遺構の重複のため明らかではない。東西2.7m、南北5.4m、深さ25～40cmである。堆積土はにぶい黄橙色、黒褐色粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

SX1768、SA1770材木列、SK1774、SK1777土坑に切られている。

SK1771土坑　長軸1.16m、短軸1.04mの楕円形を呈する土坑で、深さは9～15cmである。底面はやや凹凸があり壁は直立気味に立ち上がる。方向はE－27°－Sで、西北部がピットにより削平され痕跡のみとなっている。堆積土はにぶい黄褐色シルト質粘土である。

遺物は、須恵器甕片が1点出土している。

SD1773溝跡、ピットに切られている。

SK1772土坑　東西0.9m以上、南北0.9m以上で、深さは50cm程である。底面はほぼ平坦で、壁は北壁では緩やかに立ち上がる。東端部の方向はN－29°－Eで、さらに調査区外に延びている。堆積土は浅黄橙色、褐灰色粘土質シルト、浅黄橙色粘土である。

遺物は炉壁の付いたN－72鉄滓が出土している。

SK1776土坑　長軸1.40m、短軸0.8mの歪んだ長方形を呈する土坑で、深さは24cm程のところで平坦となり、さらに10cm程落ち込んで、底面となってる。底面はやや凹凸があり、壁は直線的に立ち上がる。方向はN－6°－Eである。堆積土は黒褐色シルト質粘土である。

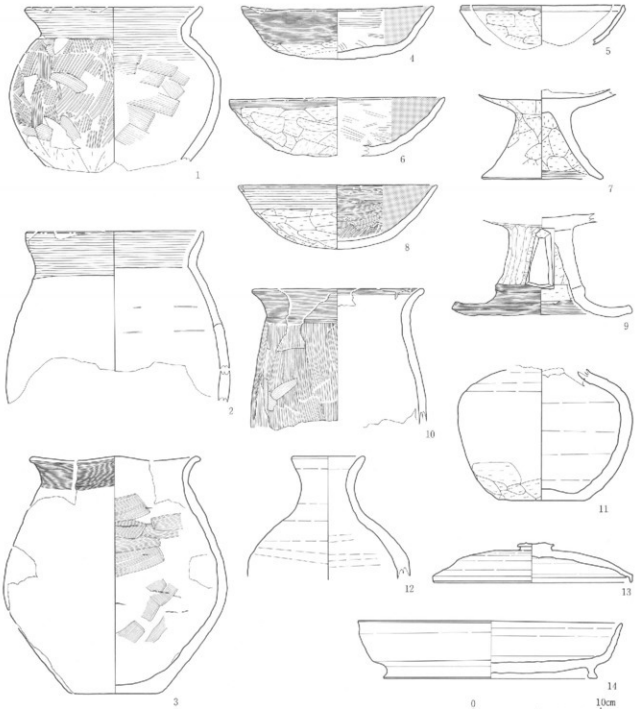
遺物は面取りされ焼け面のあるK－224礫の他、土師器坏、甕、土製品羽口片などが少量出土している。

SK1777土坑　長軸0.8m、短軸0.6mの不整の楕円形を呈する土坑で、深さは28～30cm程である。底面は凹凸があり、壁はやや丸みを帯ながら直線的に立ち上がる。方向はN－1°－Wである。堆積土は褐灰色粘土質シルト、シルト質粘土である。

遺物は面取りされ焼け面のあるK－222、223礫が出土している。

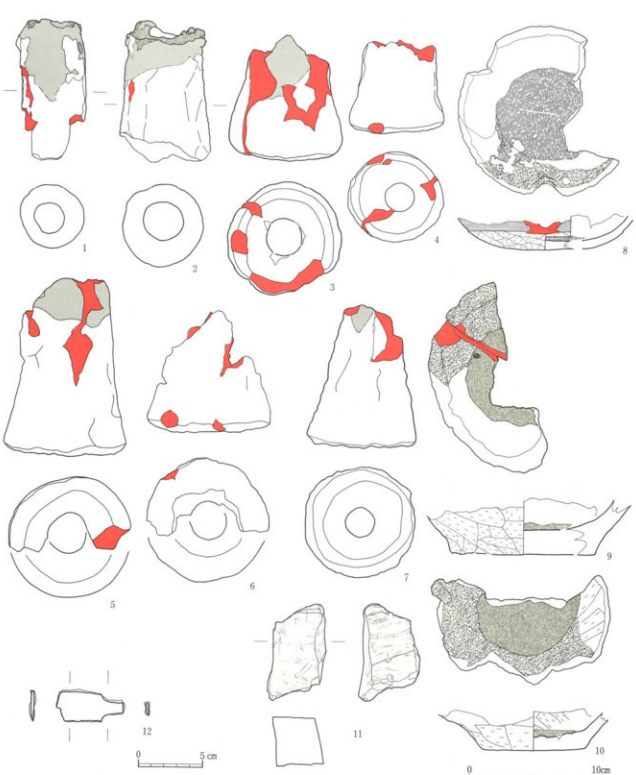
SX1781を切っている。

SK1778土坑　東西0.32m以上、南北0.5mで、深さは13cm程である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土しなかった。



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点 出土調整	法量(cm) 期位	法量(cm) 標高	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	外面調整 口縁部	外面調整 体部	外面調整 底部	内面調整 口縁部	内面調整 体部	備考	写真図版
1	C-811	土師器	壺	SX1768東半・SK1769		(13)	14.0		ヨコナデ	ヘラケズリ・ナデ・ケズリ		ヨコナデ	ヘラケズリ	残存1/3	29－8
2	C-820	土師器	壺	SX1768 西半		(11.1)	(13.8)		ヨコナデ			ヨコナデ	ナデ	残存1/10	
3	C-822	土師器	壺	SX1768東半・SK1769		19.8	(13.4)	(7.0)	ヨコナデ				ヘラケズリ	残存1/4	29－7
4	C-819	土師器	坏	SX1768		3.95	(15.1)	3.0	ヨコナデ	ヘラケズリ		ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒色処理残存1/3	29－3
5	C-814	土師器	坏	SX1768 東半		(3.1)	(12.8)		ヨコナデ	ヘラケズリ				残存1/6	
6	C-816	土師器	坏	SX1768		4.65	(16.9)		ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒色処理残存1/3	29－1
7	C-809	土師器	高坏	SX1768	1	(6.7)		9.6		ヘラケズリ・ヨコナデ		－	ヘラミガキ・ヘラケズリ	黒色処理	29－6
8	C-818	土師器	坏	SX1768 西半	5	5.1	15.6	2	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ミガキ	ミガキ	黒色処理ほぼ完形	29－2
9	C-821	土師器	高坏	SX1768 東半	8	(8.3)		14.1		ヘラケズリ・ヨコナデ	－	－	ヘラミガキ・ヘラケズリ	黒色処理	29－4
10	C-824	土師器	壺	SX1768東半・SK1769		(10.8)	13.4		ヨコナデ	ヘラケズリ・ヨコナデ		ヨコナデ		残存1/3	29－9
11	E-405	須恵器	壺	SX1768	1	(10.7)		6.8		ヨコナデ・ヘラケズリ	ケズリ		ヨクロナデ	残存1/4	29－14
12	E-412	須恵器	壺	SX1768	1	(9.8)	5.8		ヨクロナデ	ヨクロナデ		ヨクロナデ	ヨクロナデ	残存1/5	29－15
13	E-415	須恵器	蓋	SD1773	底面	3.1	15.6		ヨクロナデ	ヨクロナデ		ヨクロナデ	ヨクロナデ	残存1/4	29－12
14	E-406	須恵器	高台付坏	SX1768・SA1770	1	4.6	20.5		ヨクロナデ	ヨクロナデ	回転ケズリ	ヨクロナデ	ヨクロナデ	残存1/2	29－11

第6図　第117次調査区出土遺物（1）



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点 出土遺構	層位	法量(cm)	外面調整	内面調整	備考	写真図版
1	P−39	土製品	羽口	SX1768 東半	6・7	残存長11.1 孔径2.4 幅5.5	不明	不明	黄緑の付着物有り	30−15
2	P−37	土製品	羽口	SX1768		残存長11.3 孔径3.1 幅(7.1)	不明	ヘラケズリ		30−13
3	P−42	土製品	羽口	SX1768 西半	3・4	残存長9.6 孔径2.9 幅8.8	不明	不明		31−1
4	P−38	土製品	羽口	SX1768 東半	10	残存長7.3 孔径2.3 幅7.5	ヘラケズリ	不明		30−14
5	P−41	土製品	羽口	SX1768	1	残存長14.3 孔径3.1 幅9.6	ヘラケズリ	不明		30−11
6	P−44	土製品	羽口	SX1768 西半	5	残存長9.6 孔径3.0 幅9.6	不明	ヘラケズリ		31−3
7	P−40	土製品	羽口	SX1768 西半	1	残存長11.2 孔径2.3 幅8.7	ヘラケズリ	ヘラケズリ		30−10
8	C−841	土師器	坏(トリベ)	SX1768 東半	9	残存高2.6	口縁部ヨコナデ 体部ケズリ	体部ナデ		30−1
9	C−845	土師器	甕(トリベ)	SX1768		残存高4.5 底径11.2	体部ケズリ 底部ケズリ	体部ケズリ	赤色・黒色付着部分有り	30−5
10	C−846	土師器	甕(トリベ)	SX1768		残存高4 底径4.1	体部ヘラケズリ	体部ヘラケズリ	内面に黒色の付着物有り	30−6
11	K−219	石製品	砥石	SX1768 西半	3・4	残存長7.7 厚さ3.9 幅4.1			擦痕有り	
12	N−88	金属製品	刀子	SD1773		残存長3.6 厚さ0.2 幅1.5				31−7

第7図　第117次調査区出土遺物 (2)

図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量(cm)	外面調整	内面調整	備考	写真図版
				出土遺構	層位					
1	P－39	土製品	羽口	SX1768東半	6・7	残存長11.1 孔径2.4 幅5.5	不明	不明	黄緑の付着物有り	30－15
2	P－37	土製品	羽口	SX1768		残存長11.3 孔径3.1 幅(7.1)	不明	ヘラケズリ		30－13
3	P－42	土製品	羽口	SX1768西半	3・4	残存長9.6 孔径2.9 幅8.8	不明	不明		31－1
4	P－38	土製品	羽口	SX1768東半	10	残存長7.3 孔径2.3 幅7.5	ヘラケズリ	不明		30－14
5	P－41	土製品	羽口	SX1768	1	残存長14.1 孔径3.1 幅9.6	ヘラケズリ	不明		30－11
6	P－44	土製品	羽口	SX1768西半	5	残存長9.6 孔径3.0 幅9.6	不明	ヘラケズリ		31－3
7	P－40	土製品	羽口	SX1768西半	1	残存長11.2 孔径2.3 幅8.7	ヘラケズリ	ヘラケズリ		30－10
8	C－841	土師器	坏(トラベ)	SX1768東半	9	残存高2.6	口縁部ヨコナデ 体部ケズリ	体部ナデ		30－1
9	C－845	土師器	甕(トラベ)	SX1768		残存高4.5 底径11.2	体部ケズリ 底部ケズリ	体部ケズリ	赤色・黒色付着物分有り	30－5
10	C－846	土師器	甕(トラベ)	SX1768		残存高4 底径4.1	体部ヘラケズリ	体部ヘラケズリ	内部に黒色の付着物有り	30－6
11	K－219	石製品	砥石	SX1768西半	3・4	残存長7.7 厚さ3.9 幅4.1			膠底有り	
12	N－88	金属製品	刀子	SD1773		残存長3.6 厚さ0.2 幅1.5				31－7

第7図　第117次調査区出土遺物 (2)

SX1768 に切られている。

SX1824　長軸0.67m、短軸0.28～0.38mの煙道状の落ち込みで、北端から傾斜をもって徐々に深くなり最深部で22cmである。方向はN－23°－Eである。堆積土は暗褐色シルトで、3層と5層は火熱により硬化した可能性がある。遺物は出土しなかった。

SX1781を切り、SX1768に切られている。

SK1769土坑　長軸2.2m、短軸1.52～1.82mの隅丸の長方形を呈する土坑で、深さは40cm程である。底面はほぼ平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。方向はN－6°－Eである。堆積土は褐灰色粘土質シルト、シルト質粘土である。

遺物は内面に漆の付着した須恵器E－413平瓶と炉壁の密着したN－64鉄滓などのほか、土師器坏、甕片、須恵器甕片が出土している。

SX1768を切っている。

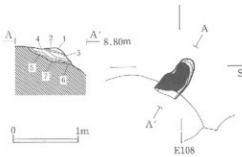
SK1774土坑　規模、平面形は不明瞭で、西端ではやや方形となる。深さは16～34cm程である。堆積土は褐灰色、黒褐色シルト質粘土である。複数の遺構に分離される可能性もある。

遺物は土師器片が少量とカエリのない須恵器蓋が1点出土している。

SA1770材木列、SX1768、1781を切っている。

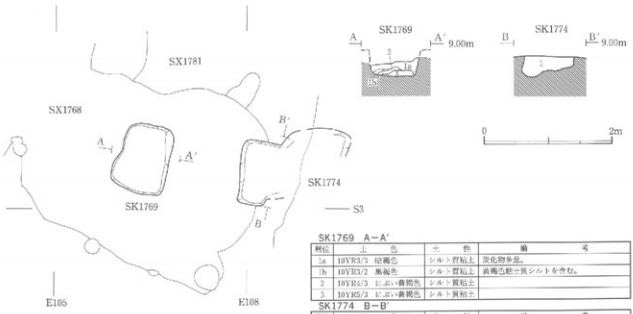
Pit85　直径46cmのやや歪んだ円形のピットである。深さは55cm程で、底面は平坦である。壁の南側は直立気味に立ち上がるが、北側ではオーバーハング状になっている。堆積土は暗褐色シルト、シルト質粘土、褐色、にぶい黄褐色シルト質粘土である。

遺物はトリベとして使用された土師器坏片が7点のほか、土師器坏、甕片、須恵器甕片が少量出土している。



層位	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色シルトを含む。
2	2.5YR 暗赤色	シルト	
3	5YR5/8 明赤褐色	(焼土)	壁上部に砂質シルト分布。
4	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物を含む。
5	5YR5/8 明赤褐色	(焼土)	
6	10YR3/3 暗褐色	シルト	焼土をブロック状に多く含む。
7	2.5YR 暗赤色	シルト	

第8図　SX1824平・断面図（1/60）



SK1769　A－A'

層位	土色	土性	備考
1a	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	炭化物多量。
1b	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	黄褐色粘土質ブロックを含む。
2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	
3	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	

SK1774　B－B'

層位	土色	土性	備考
1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	炭化物を斑状に含む。

第9図　SK1769・1774土坑平・断面図（1/60）

SK1764 井戸跡　長軸0.9m、短軸0.60～0.66mの楕円形を呈する土坑で、深さは24cm程である。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ緩やかに立ち上がる。方向はN－20°－Eである。堆積土は灰黄褐色シルトである。

遺物は土師器片が少量出土している。

SD1773溝跡を切っている。

SK1766 土坑　東西2.5m、南北0.72m以上で、深さは63～75cm程である。底面はやや凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。さらに調査区外に延びているため、全容は明らかでない。堆積土は灰黄褐色、暗褐色シルト質粘土、灰黄褐色、黒褐色粘土である。

遺物はトリベとして使用された土師器坏片が7点のほか、土師器坏、甕片、羽口片が少量出土している。

SA1770材木列、SD1773溝跡を切っている。

SE1767 井戸跡　東西1.1m、南北1.2mのやや歪んだ円形で、深さは120cm以上である。壁は直立気味に立ち上がっている。堆積土は黒色、黒褐色シルト質粘土である。重複のあるSA1770材木列を遺構保存するため、遺構を確認するに留めている。

遺物は土師器、須恵器片が少量出土している。

SA1770材木列を切っている。

SK1874　東西0.4m以上、南北1.9m程である。さらに調査区外に延びているため、全容は明らかでない。重複のあるSA1770材木列を遺構保存するため、遺構を確認するに留めている。

これらの遺構の他に直径20～40cm、深さ20～77cmの掘り方で、直径8～24cm程の柱痕跡を有する小柱穴（註2）による建物跡、柱列が発見されている。これらは古代の遺構と考えられるSX1768、SA1770材木列、SD1773溝跡、SK1771、SK1772土坑などを切っている。

第1建物跡　南北2間以上（総長2.4m以上、柱間寸法120cm）、東西1間以上（総長1.2m以上、柱間寸法120cm）の建物跡で、方向は南北方向でN－37°－Eである。

第2建物跡　南北1間以上（総長1.9m以上、柱間寸法190cm以上）、東西1間以上（総長2.2m以上、柱間寸法220cm）の建物跡で、方向は南北方向でN－10°－Eである。

第3建物跡　南北2間以上（総長2.6m以上、柱間寸法80～115cm、165cm）、東西5間以上（総長6.9m以上、柱間寸法100～105cm、185～200cm）の建物跡で、北と西に廂あるいは縁の付く可能性がある。方向は南北方向でN－28°－Eである。北1西5柱穴より18×12cm、厚さ2.5cmの板状の材が出土している。

SK1766

層位	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	黄褐色シルト質粘土を含む。
2a	10YR4/4 灰黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色シルト質粘土を含む。
2b	10YR4/2 灰黄褐色	粘　土	灰黄褐色シルト質粘土を含む。
3	10YR3/2 黒褐色	粘　土	灰黄褐色粘土を含む。
4	10YR2/2 黒褐色	粘　土	黄褐色粘土を含む。

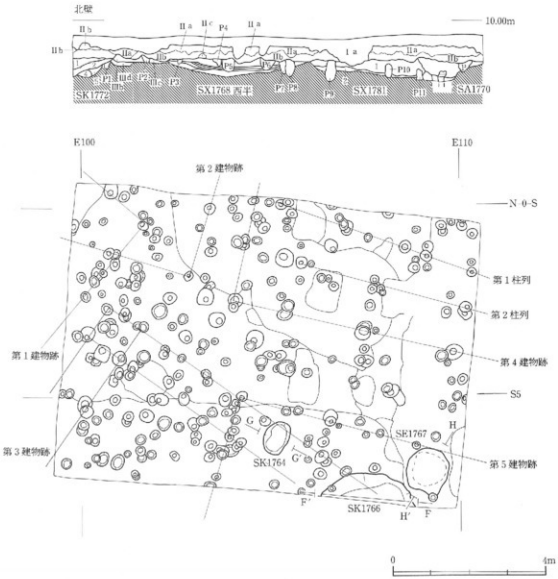
SK1764

層位	土色	土性	備考
1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	
2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	炭化物と焼化粒を少量含む。

SE1767

層位	土色	土性	備考
1a	7.5YR2/1 黒色	シルト質粘土	褐灰色粘土質シルトと炭化物を含む。
1b	7.5YR2/1 黒褐色	シルト質粘土	暗褐色シルト質粘土を含む。
1c	10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	
1d	10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	明黄褐色シルトを多量に含む。
1e	10YR2/1 黒色	粘　土	

第10図　土坑・井戸跡断面図（1/60）



北壁

遺構名	層位	土色	土性	備考
基本層位	Ⅰ	10YR8/4 浅黄橙色	砂	縦あり、鉄土
	Ⅱa	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	炭化物含む。
	Ⅱb	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	
	Ⅱc	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	
	Ⅲa	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	黄橙色シルトを含む。
	Ⅲb	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	黄橙色シルトを少量含む。
	Ⅲc	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	黄化物・鉄土を少量含む。
	Ⅲd	2.5YR4/4 浅黄色	粘土質シルト	
	Ⅳ	10YR5/4 にぶい黄橙色	粘土質シルト	
	Ⅴ	10YR8/3 灰白色	粘土	砂を少量、橙色鉄を多量に含む。
	Ⅵ	10YR8/2 灰白色	粘土	砂を部分的に帯状に含む。
	Ⅶa	10YR7/1 灰白色	粘土	
	Ⅶb	10BG7/1 明青灰色	粘土	
SK1772	1	10YR8/4 浅黄橙色	粘土質シルト	褐灰色粘土質シルトを多量に含む。
	2	10YR3/1 褐灰色	粘土質シルト	炭化物を多量に含む。 浅黄橙色粘土質シルトを多量含む。
	3	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	浅黄橙色粘土質シルトを多量に含む。
	4	10YR8/4 浅黄橙色	粘土	褐灰色粘土質シルトを少量含む。 鉄化物を含む。
	5	10YR8/4 浅黄橙色	粘土	
SX1781	1	10YR7/4 にぶい黄橙色	粘土質シルト	褐色シルトをブロック状に含む。
	2	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	

遺構名	層位	土色	土性	備考
P4	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	炭化物を少量含む。
	2	10YR4/1 褐灰色	シルト	
	3	10YR4/1 褐灰色	シルト	
	4	10YR4/1 褐灰色	シルト	
	5	10YR4/1 褐灰色	シルト	
	6	10YR5/1 褐灰色	シルト	黄褐色粘土を多量に含む。
	7	10YR5/1 褐灰色	シルト	黄褐色粘土を少量含む。
	8	10YR5/1 褐灰色	シルト	黄褐色粘土を多量に含む。
	9	10YR5/1 褐灰色	シルト	黄褐色粘土を多量に含む。
	10	10YR4/1 褐灰色	シルト	
	11	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	基本層位IV層をブロック状に含む。

第11図　第117次調査区平面図 B・断面図

第4建物跡　南北1間以上（総長1.4m以上、柱間寸法140cm）、東西3間以上（総長6.0m以上、柱間寸法140cm、210～250cm）の建物跡である。方向は南北方向でN－8°－Eである。第2柱列と同一の遺構となり、建物跡の廂あるいは縁となる可能性がある。

第5建物跡　南北1間以上（総長2.2m以上、柱間寸法220cm）、東西2間以上（総長4.8m以上、柱間寸法235～245cm）の建物跡で、方向は東西方向でE－10°－Sである。北西コーナーの柱穴より古銭N－61皇宋通宝（写真図版31－9）が出土している。

第1柱列　東西3間以上（総長5.4m以上、柱間寸法162～190cm）で、方向はE－12°－Sである。西2柱穴より枝状の材が出土している。

第2柱列　東西2間以上（総長4.6m以上、柱間寸法205～255cm）で、方向はE－9°－Sである。第4建物跡と同一の遺構となって、建物跡の身舎となる可能性がある。

3．ま と め

主な遺構の重複関係を整理すれば次のようになるが、並列関係は必ずしも同時性を示すものではない。

SK1776、SD1874については、他の遺構との重複がないため、新旧関係は不明である。

これらの遺構の中で、SA1770材木列はこれまでの調査からII期官衙の外郭となる遺構である。SD1773溝跡もSA1770材木列に直交し、材木列の掘り方と接する箇所で途切れるような形状であることから、II期官衙の遺構と考えられる。SA1770材木列と同じようにSX1781を掘り込んでいるSX1768は、材木列の内側に位置し、官衙内部にある遺構と見ることもできる。しかしSX1768から出土した須恵器E－406高台付坏やトリベとして使用されたC－844甕の破片がSA1770材木列の掘り方中からも出土している。またSX1768から出土している羽は、鉄滓、漆の付着した土器と同じ特徴を示すものも材木列掘り方から出土しているため、SX1768がSA1770材木列よりも先行する可能性が指摘される。なお第11図の平面図Bに掲載した遺構については、官衙の時期の遺構が埋まってから掘り込まれており、官衙より新しい時期の遺構である。このうち小柱穴による建物跡、柱列については、第5建物跡の柱穴より模鋳銭とみられるN－61皇宋通宝が出土していることから、14世紀前半以降の建物跡群（註3）と推定される。

SX1768は、遺構検出段階では重複が確認されず、単一の土坑とみられたが、完掘状況の観察によれば、土坑が2、3基連結したような形状をしている。断面観察をすると西半より東半の方が先に埋まり始めた可能性がある。また人為的に埋め戻されたとみられる層（西半3～6b、東半6～13）と自然堆積とみられる層（西半1、2、東半4、

5）があり、西半の第5層や東半の第8層のように炭化物だけの層もある。東半の底面付近からは焼け面のある礫などがまとまって出土し、上層の多くの遺物と同じように投棄されたものと推定される。断続的に土層の堆積ならびに遺物の投棄が行なわれていたと推定される。

出土した遺物を見ると、多量の土器類の他に、⑴鉄・銅関連遺物（①鉄滓や鉱滓類　②トリベや羽口など　③石製品や礫など）、⑵漆の付着した遺物（①土器類　②漆膜）が出土している。

⑴　鉄・銅関連遺物

①　鉄滓や鉱滓類

・炉壁が付着した鉄滓

N－63、66、67、75、78（いわゆる椀形滓）

N－64、65、70、73、76、82

・鉄滓

N－71（木炭が混入）、74（白色の石が混入）、77、80（木炭が混入、椀形滓）、81（木炭が混入）

・その他の鉱滓類

N－69（炉壁に赤色ならびに黒色の鉱滓が付着）　N－69と同様のものが小破片で、他に数点ある。

・鍛造剥片　少量

②　トリベや羽口など

・トリベ

C－839（黒色の付着物）、840（赤色と緑色の付着物）、847（黒色の付着物）

これらのうちC－839は坏に似た形態で、底部は丸底風で口縁部にむかった外反気味となり、外面はヘラケズリ調整が顕著である。C－840は楕円形で高さが2.5cm程の厚手で、小型のものである。C－847は坏に似た形態であるが、やや楕円形で、底部には4条を1単位とする擦痕状の調整が施されている。いずれも既存の土器形態には見られないもので、トリベとして使用するために作成されたものであろう。それ以外のトリベとして使用された土師器は、坏や甕の上方を打ち欠いて底部を再利用したものである。

・トリベとして再利用された土師器

C－841坏（赤色の付着物）、842甕（赤色と黒色の付着物）、843甕（黒色の付着物）、844甕（黒色と赤色の付着物）、845甕（黒色の付着物）、846甕（黒色の付着物）、848坏（赤色と黒色の付着物）

・羽口

P－37～45までのうち元口から先端まで原形を留めているものはない。元口はラッパ状に開くものがあり先端部は黒色や緑色の付着物が顕著である。

③　石製品や礫など

・砥石

K－217、219砥石（擦痕あり）

・礫

K－226（焼け面）、227（焼け面）、228（石核状）、229（面取り、敲打痕跡）、231（焼け面）、232（焼け面）

⑵　漆の付着した遺物

①　土器類

C－812甕、815壺、816壺、835坏、836坏、837甕、838甕

② 漆膜

O－2、3（布の繊維痕跡）

ＳＸ1768出土のＯ－２，３漆膜

鉱滓類やトリベの中で、赤色の付着物については銅の成分が多く、多量の鉄滓の中で炉壁が付着しているものの中には、鉄の鍛冶炉壁となるものなどがある（註４）。銅については、トリベが出土していることから「鋳造」が、鉄については、鍛造剝片や炉壁が出土していることから「鍛冶」が行われていたのであろう。その他の鉱滓類については原材料の精錬から製品の作成までの工程の中でどの段階の遺物であるのかは、科学分析等を通じての今後の検討課題としておく。砥石や焼け面、面取りされた礫なども、これら金属関係の作業に関わる遺物あるいは遺構の一部であった可能性が強い。なお漆の付着した遺物も出土していることから、鉄、銅などの他に漆に関する作業をする施設も周辺に存在していたのであろう。

SX1768の時期であるが、先に述べたようにⅡ期官衙の外郭となる材木列掘り方埋め土中から、SX1768の出土遺物と同一個体となるものや、関連した遺物が出土していることから、材木列の建設以前に遡ると考えられる。出土した遺物では、最上層の第１層から出土したＥ－406高台付坏は口径が21cmと大きく、郡山遺跡からこれまで出土した高台付坏の中では、もっとも大きいものである。類似する高台付坏は、仙台市土手内横穴墓群Ｂ地点の４号横穴墓や宮城県利府町硯沢窯跡のＢ２、３号窯跡、福島県相馬市善光寺遺跡２号Ｂ窯跡などで出土している。また口径は小さくなるが高台の形態では、宮城県涌谷町長根窯跡Ａ地点１号窯跡出土の特徴と同じくするものである。このうち善光寺遺跡の２号Ｂ窯跡で、この特徴を有する高台付坏は、直径15～20cmの内面にカエリのある蓋と共伴しており、７世紀後半代のものと考えられている（註５）。また脚部にスリット状の細長い窓を有するＥ－407高坏片は、東北地方では出土例が知られていないものである。平城宮の遺構からも出土（註６）しているが、須恵器の高坏の脚部に窓を有するものは、７世紀代のものに多く、このようなスリット状の窓を有するものも、７世紀代から存在していると言う（註７）。これらのことからSX1768が材木列に先行する７世紀代に埋め戻されていたことが明らかであろう。しかしⅠ期官衙の時期まで遡るのか、Ⅱ期官衙造営時の施工手順の中で先行するだけなのかについては今のところ明らかではない。

なおSX1768に切られたSX1824は、住居の煙道状の形態をし、火熱をうけた面が存在する。火熱を伴う作業を繰り返し行なわれていた可能性がある。今後関連する遺構の検出や、他遺跡での類例の蓄積を待って検討していきたい。

Ⅳ　第118次発掘調査

1．調　査　経　過

第118次調査は仙台市太白区郡山６丁目３－28田崎寅氏より、同住所において住宅の解体新築に伴う発掘届が、平成10年２月20日付けで提出された。住宅の基礎が遺構の検出面より深く、遺構を損なうため発掘調査を実施した。調査区は、住宅の建つ部分を対象に東西7.5m、南北６ｍの調査区を設定し、平成10年５月26日に表土排除を実施した。現況より深さ0.9mで遺構を検出したが、遺構数は少なく調査は６月12日に終了した。

2．発見遺構・出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡１棟、溝跡１条、土坑１基、ピットなどである。

SB1805 掘立柱建物跡　調査区の南半で検出した桁行１間以上(総長2.75m以上、柱間寸法275cm)、梁行２間(総長3.95m、柱間寸法175～220cm)の建物跡と推定され、方向は西桁行でＮ－43°－Ｅである。柱穴は30～35×32～44cmのやや歪んだ隅丸方形で、柱痕跡は13～17cmの円形である。柱穴の深さは29～52cmである。埋土は黒褐色粘土あるいは灰黄褐色粘土である。

遺物は桁行北柱穴掘り方より、土師器甕の底部片が一点出土している。

SD1782溝跡、SK1779土坑を切っている。

SD1782 溝跡　上幅35～60cm、底面幅20～50cm以上、深さ７～16cm、断面形は扁平な逆台形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。方向はＮ－35°－Ｅで、検出した総長は5.4mである。堆積土はオリーブ黒色、暗灰黄色シルトである。遺物は出土しなかった。

SB1805掘立柱建物跡に切られている。

SK1779 土坑　長軸0.64m以上、短軸0.40～0.46mのやや歪んだ楕円形を呈する土坑で、深さは35cm程である。底面は10cmで平坦となり、北端のみピット状に落ち込んでいる。壁は傾斜を持って直線的に立ち上がる。方向はＮ－52°－Ｅである。堆積土はにぶい黄褐色粘土質シルト、褐色シルトである。

遺物は土師器坏、甕片、須恵器片が少量出土している。

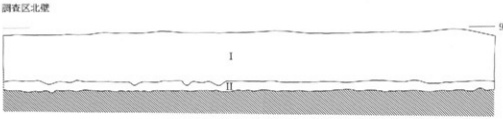
SB1805掘立柱建物跡に切られている。

3．ま　と　め

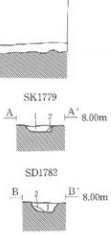
この調査区は、南方官衙西地区とした第85次調査区で発見されたSB1277建物跡(四面廂付建物)に近接しているため、Ⅱ期官衙に関連する遺構の存在を想定したが、そのような遺構は発見されなかった。発見されたSB1805掘立柱建物跡は、小規模な柱穴の掘り方であるが、官衙の年代より降る遺物がまったく出土していないことや同様の規模、

第12図　第118次調査区位置図

方向を示す建物跡や柱列が西に隣接する第124次調査区（註８）から発見されていることから、Ⅰ期官衙と同時期の可能性が推定される。



遺構名	層位	土色	土性	備考
北壁セクション				
基本層位	I			盛土
	II	10YR4/1 褐灰色	粘土	
	III	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土質シルトを小ブロック状に含む。
SK1779 A－A'				
	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂土質シルト	褐色シルトを小ブロック状に含む。
	2	10YR4/6 褐色	シルト	
SD1782 B－B'				
	1	5Y3/3 オリーブ黒色	シルト	オリーブ褐色シルトをブロックで含む。
	2	2.5Y4/2 暗灰黄色	シルト	



第13図　第118次調査区平・断面図（1/60）

V　第119次・第120次発掘調査

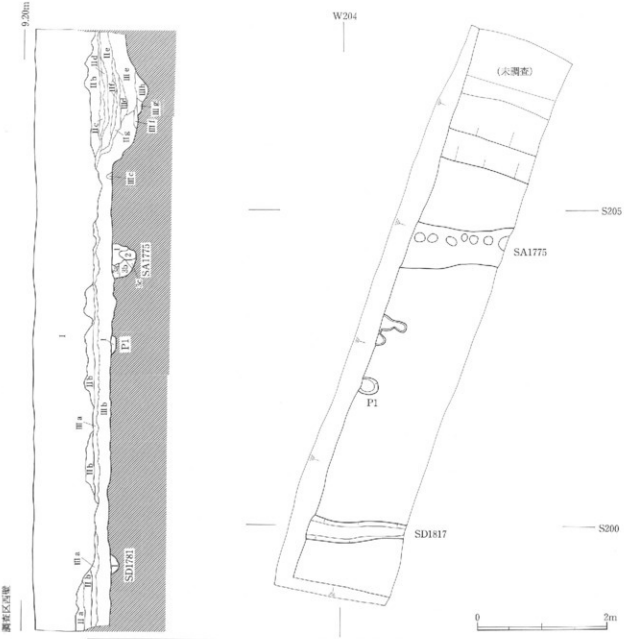
1．調　査　経　過

第119次、第120次調査は、方四町II期官衙南方に位置する郡山廃寺の範囲を明らかにするための調査である。郡山廃寺の範囲については、平成８年度に第113次調査を実施し、寺院の中枢伽藍の区画が通過する想定位置からは遺構が検出されなかった。よって昭和56年度に実施した第15次調査で検出されている SA177 杭列までを取りあえず寺院の範囲としておいた（註９）。今年度は第４次５カ年計画では4年次目にあたり、計画では今年度と来年度は郡山廃寺の調査を実施することになっているため、寺院の範囲について北辺と東辺、ならびに東辺南端での南辺の検出を目的とした調査を計画した。

寺院の北辺と東辺を確認するためには、寺院の北辺と推定している第62次調査で検出した SA830 材木列の東への延長部と第15次調査で検出されている SA177 杭列の南と北の延長部を調査し、一連の遺構となるかどうかを確認する必要があった。本来なら SA830 の東延長上と SA177 の北延長上と、各々の接続するコーナーの部分の発掘調査の実施によって、寺院周囲を連続的に巡る遺構であることの確認が出来ればよいのであるが、調査対象地が郡山中学校の校庭となっており、中学校の教育活動、既存施設の存在のため大きく制約を受けているため、中学校の校庭内の西端、南端に材木列の存在を確認するための小規模な調査区（第119次 A、B 区）を設定した。またさらに南の東北電力所有地内に寺院の南辺となる遺構の検出を目的として第120次調査区を設定して、発掘調査を実施した。

第119次調査で SA177 が南方へ延びることが確認され、推定延長上に第120次調査区を設定して調査をした。第120次調査区では SA177 の推定延長上よりややずれがあり、またさらに南に延びる状況であったため、調査区の拡張を実施した。

第14図　第119次・第120次調査区位置図



遺構名	層位	土色	土性	備考
基本層位	I			盛土
	II a	10YR4/1 褐灰色	焼土質シルト	炭化物をまばらに含む。グライ化が著しい。
	II b	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を全体に含む。グライ化がやや進む。
	II c	10YR2/1 黒色	粘 土	灰黄褐色粘土を少量含む。
	II d	10YR5/1 灰黄褐色	粘 土	
	II e	10YR4/2 灰黄褐色	粘 土	灰白焼土を含む。
	II f	10YR7/1 灰白色	火山灰	火山灰
	III a	10YR5/2 灰黄褐色	粘 土	酸化鉄と炭化物を全体に含む。
	III b	10YR5/1 褐灰色	粘 土	灰黄褐色土とブロック状に含む。
	III c	10YR4/2 灰黄褐色	粘 土	褐灰色粘土を含む。
	III d	10YR4/2 灰黄褐色	粘 土	
	III e	10YR4/2 灰黄褐色	粘 土	黒褐色土をブロック状に含む。
	III f	10YR4/1 褐灰色	粘 土	酸化鉄を全体に多く含む。
	III g	10YR5/2 灰黄褐色	粘 土	にぶい黄橙色粘土を多量に含む。
	III h	10YR4/2 灰黄褐色	粘 土	炭化物を全体に含む。植痕を一部に含む。
	IV	7.5YR5/8 明褐色	粘 土	褐灰色粘土のブロックを全体に下層に炭化物を含む。
SD1817	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘 土	マンガン粒と褐灰色粘土をブロック状に褐色土を粒状に含む。
P1a	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘 土	褐灰色粘土をブロック状に含む。
SA1775	1	10YR5/1 褐灰色	シルト質粘土	褐灰色粘土をブロック状に含む。
	2	10YR3/2 黒褐色	粘 土	炭化物を全体に含む。
	3a	10YR3/3 黒褐色	粘 土	褐色土をブロック状に含む。
	3b	10YR4/1 褐灰色	粘 土	明黄褐色粘土をまばらに褐灰色粘土をブロック状に含む。
	3c	10YR7/2 にぶい黄橙色	シルト質粘土	酸化鉄と灰黄褐色粘土を全体に多量に含む。

第15図　第119次調査 A 区平・断面図 (1/60)

2．発見遺構・出土遺物

(1) 第119次調査Ａ区

今回の調査で発見された遺構は、材木列１列、溝跡１条、ピットなどである。なお調査区北端で溝状に落ち込んでいるが、他の遺構が検出された第Ⅳ層上面や、さらに上層から掘り込まれた痕跡を確認することが出来なかった。

SA1775 材木列　調査区の中央やや北寄りでＥ－3°－Ｎ方向に延びる材木列を検出した。検出長は1.8m、掘り方の上幅は52～74cm、下幅は43～57cm、深さは25～35cmである。掘り方の中央に直径12～20cmの柱痕跡が見られる。掘り方の断面形はＵ字形で、埋土は褐灰色、黒褐色粘土、褐灰色シルト質粘土などである。

遺物は、土師器甕の小片が３点、縄叩きののち磨り消された平瓦片が２点出土している。

SD1781 溝跡　上幅25～40cm、底面幅12～23cm以上、深さ5～10cm、断面形はＵ字形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はＥ－7°－Ｓでやや蛇行し、検出した総長は1.8m である。堆積土は灰黄褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

遺構を検出した上層の第Ⅲ層中より、赤焼き土器Ｄ－51、52高台付坏（第19図１、２）や土師器、須恵器、瓦の小片が少量出土している。

(2) 第119次調査Ｂ区

今回の調査で発見された遺構は、材木列１列、溝跡１条、ピットなどである。

SA177 材木列　調査区の中央やや北寄りでＮ－1°－Ｗ方向に延びる材木列を検出した。検出長は1.9m、掘り方の上幅は40～53cm、下幅は25～32cm、深さは14～16cmである。掘り方の中央に直径10～15cmの柱痕跡が見られる。掘り方の断面形はＵ字形である。南端では上幅は85～91cm、下幅は60cm、深さは100cm程の柱穴状になる。この部分での柱痕跡も直径は25cmとなる。

遺物は、縄叩きののち磨り消されたＧ－84 平瓦（第19図４）と土師器甕片と須恵器坏片が少量出土している。

SD142 溝跡　上幅180～195cm、底面幅60～70cm、深さ70cm程、断面形は逆台形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がるが、西壁中に段を有する。底面はほぼ平坦である。方向はＮ－9°－Ｅで、検出した総長は1.8m である。堆積土は黒褐色、灰黄褐色、にぶい黄褐色シルトなどで、2b 層は灰白色火山灰である。

遺物は、両面黒色処理された土師器Ｄ－53 壺（第19図３）や土師器坏、甕片、須恵器甕片、瓦片が少量出土している。

遺構を検出した第Ⅲ層上面より、Ｋ－21 擦り石の他、赤焼き土器の坏底部片や土師器坏、甕片、須恵器甕片、丸瓦、平瓦が少量出土している。

(3) 第120次調査区

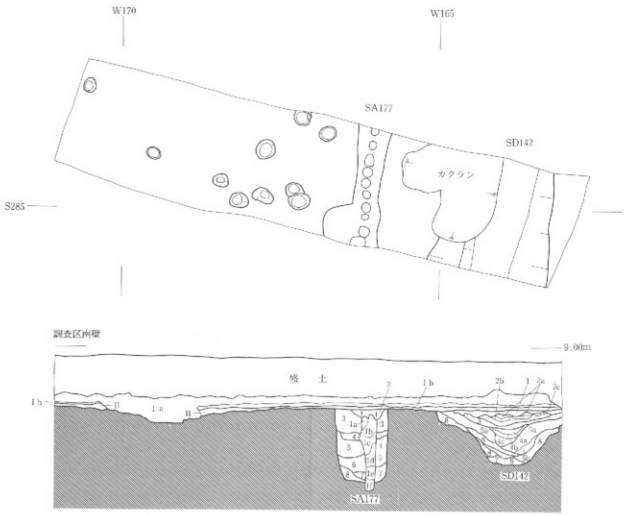
今回の調査で発見された遺構は、材木列１列、溝跡4条、土坑２基、性格不明な遺構１、ピットなどである。調査区は撹乱が著しく、既存の送電施設内のため調査区の設定にも制約があり、遺構の様相を把握するのに困難な状況にあった。

SA1785 材木列　拡張した調査区のＡ区、Ｃ区でＮ－0°－Ｅ(真北)方向に延びる材木列を検出した。掘り方の上幅は15～22cm、下幅は15cm程、深さは15～30cmである。掘り方の中央に直径10～19cmの柱痕跡が見られる。掘り方の断面形はＵ字形である。北方から延びると推定した材木列の位置より、西に１ｍ程ずれて検出された。またＤ区では遺構を検出できた標高が、Ｃ区のSA1785 材木列の掘り方底面より低いため検出されなかった。

遺物は、土師器坏、甕、須恵器甕片が少量出土している。

SD1796 溝跡に切られている。

SD1789 溝跡　上幅200cm、底面幅80cm、深さ43～58cm程、断面形は逆台形の溝跡である。上幅は一定せず凹凸が



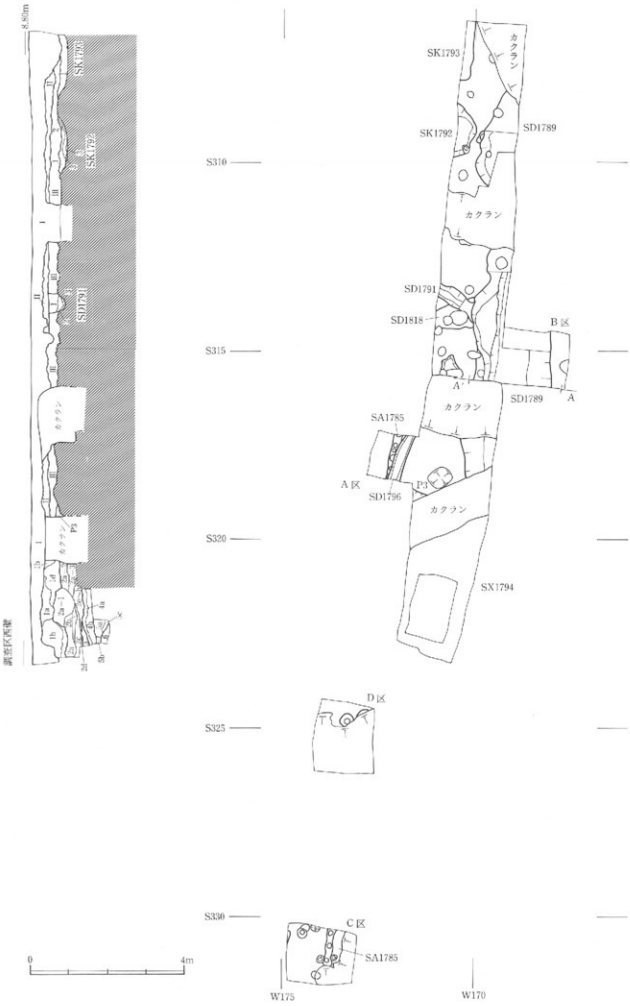
0 2m

B区 南壁

遺構名	層位	土色	土性	備考
SA177	1a	10YR2/3 暗褐色	粘土	性状層
	1b	10YR2/2 黒褐色	粘土	性状層
	1c	10YR3/3 暗褐色	粘土	性状層
	1d	10YR2/2 黒褐色	粘土	性状層
	1e	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	性状層
	1f	10YR3/1 黒褐色	粘土	性状層
埋り方	2	10YR1/2 灰黄褐色	粘土質シルト	
	3	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	
	4	10YR3/2 黒褐色	粘土	灰白色粘土を多量に含む。
	5	10YR3/2 黒褐色	粘土	炭化物を含む。
	6	10YR3/1 黒褐色	粘土	灰白色粘土などを含む。
	7	10YR3/1 黒褐色	粘土	灰白色粘土を多量に含む。
	8	10YR3/2 黒褐色	粘土	灰白色粘土をブロック状に含む。

遺構名	層位	土色	土性	備考
基本層位	I a	10YR4/1 褐灰色	粘土	旧水田耕作土
	I b	7.5YR5/8 明褐色	酸化鉄層根跡	
	II	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	土師にマンガン粒を含む。
	III	10YR3/4 暗褐色	シルト	
	IV	10YR5/6 黄褐色	シルト	
	V	10YR7/2 にぶい黄橙色	軟十質シルト	
	VI a	2.5Y2/1 黒褐色	粘土	
	VI b	2.5Y6/1 黄灰色	粘土	
	VII	2.5Y7/1 灰白色	粘土	
SD142	1	10YR3/1 黒褐色	シルト	下層に灰白色火山灰を含む。
	2a	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	灰白色火山灰をわずかに含む。
	2b	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	灰白色火山灰。
	2c	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	灰白色火山灰をまばらに含む。
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	
	4a	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物を含む。
	4b	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物、黄褐色シルトを含む。
	4c	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	黄褐色シルトを含む。
	5a	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	黄褐色シルトを含む。
	5b	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	
	6	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	黄褐色シルトを多く含む。
	7	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	
	8	10YR4/4 褐色	シルト	黄褐色シルトを多く含む。
	9	10YR7/2 にぶい黄橙色	軟十質シルト	

第16図　第119次調査 B 区平・断面図（1/60）



第17図　第120次調査区平・断面図（1/100）

ある。壁は緩やかに立ち上がるが、西壁中に段を有する。底面はほぼ平坦である。方向はN－3°－Wと推定され、検出した総長は6m程である。堆積土は暗褐色シルト、粘土質シルト、にぶい黄橙色砂質シルトなどである。

遺物は、内面にカエリを有する須恵器E－404蓋、底面が回転ヘラケズリ調整された須恵器E－403甕の底部片、土製品P－31羽口の小片、N－58鉄滓はじめとする少量の鉄滓などの他、土師器坏、甕片、須恵器坏片、平瓦片が出土している。

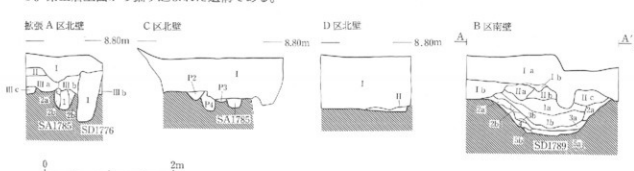
撹乱により著しく削平されている。

SD1791 溝跡　上幅35～45cm、底面幅12～20cm、深さ14～16cm、断面形はU字形の溝跡である。壁は中程まで緩やかに立ち上がり、それより上方は直立気味となる。底面はほぼ平坦である。方向はE－26°－Sで、検出した総長は1.1mである。堆積土は暗褐色、黒褐色、褐色シルトである。第Ⅲ層上面から掘り込まれた遺構である。

遺物は、土師器甕片が1点出土している。

SD1818溝跡を切り、SD1789溝跡に切られている。

SD1796 溝跡　上幅25～31cm、底面幅15～20cm、深さ80cm程、断面形は逆台形の溝跡である。壁は直立気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はN－12°－Eで、検出した総長は1.3mである。堆積土は褐色シルトである。第Ⅲ層上面から掘り込まれた遺構である。



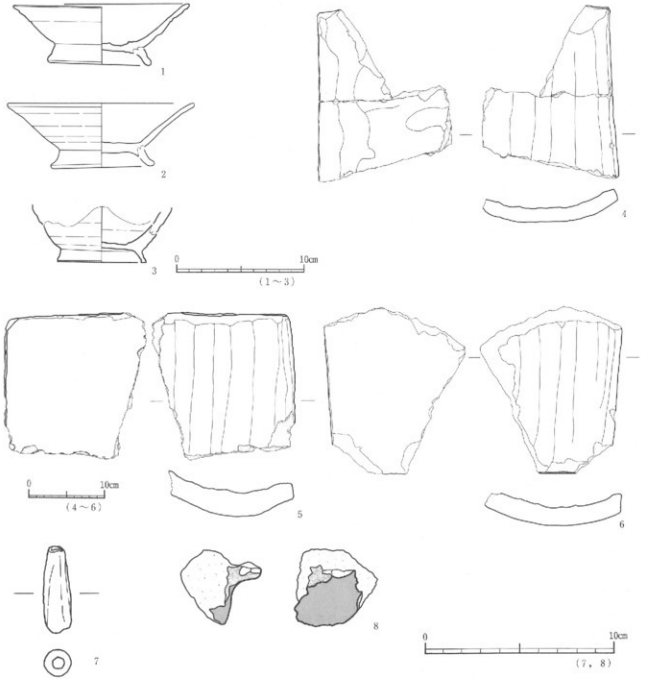
拡張A区　北壁

遺構名	層位	土色	土性	備考
基本層位	Ⅰ			砕石
	Ⅱ	10YR4/4 褐色	シルト	
	Ⅲa	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	
	Ⅲb	10YR4/4 褐色	シルト	炭化物粒・焼土粒を少量含む。
	Ⅲc	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	
	Ⅳ	10YR3/5 黒褐色	シルト	
SA1785	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	炭化物を含む。
	2a	10YR3/4 暗褐色	シルト	
	2b	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄褐色シルトを含む。
SD1776	1	10YR4/4 褐色	シルト	白色粘土をブロック状に含む。
拡張C区　北壁				
基本層位	1			砕石
Pit 2	1	10YR4/3 暗色	シルト	
Pit 3	1	10YR4/3 暗色	シルト	
Pit 4	1	10YR4/3 暗色	シルト	暗褐色シルトを含む。
SA1786	1	10YR4/3 暗色	シルト	褐色シルト、焼化粒含む。
拡張C区　北壁				
基本層位	Ⅰ			砕石
	2.5Y6/2	灰黄褐色	シルト	酸化鉄を含む。
拡張B区				
基本層位	Ⅰa			砕石
	Ⅰb	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物を少量含む。
	Ⅱa	10YR4/4 褐色	シルト	
	Ⅱb	10YR4/4 褐色	シルト	炭化粒、黄褐色シルトを少量含む。
	Ⅱc	10YR3/4 暗褐色	シルト	
SD1789	1a	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物を少量含む。
	1b	10YR3/4 暗褐色	シルト	砂を少量含む。
	2a	10YR2/4 暗褐色	シルト	
	2b	10YR4/4 褐色	シルト	
	3a	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒を少量含む。
	3b	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	
	4	10YR4/6 褐色	砂質シルト	
	5a	10YR7/2 にぶい黄橙色	砂質シルト	3a層をブロック状に含む。
	5b	10YR7/2 にぶい黄橙色	砂質シルト	酸化鉄を含む。

西壁

遺構名	層位	土色	土性	備考
基本層位	Ⅰ	10YR4/4 褐色	シルト	
	Ⅱ	10YR3/4 暗褐色	シルト	
	Ⅲ	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	
	Ⅳ	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	
SD1791	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト	
	3	10YR4/6 褐色	シルト	
SK1792	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	
	3	10YR4/6 褐色	シルト質粘土	
SK1293	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	
SX1294	1a	10YR4/4 褐色	シルト	
	1b	10YR4/4 褐色	砂質シルト	酸化鉄を少量含む。
	1c	10YR4/4 褐色	砂質シルト	酸化鉄を多量含む。
	2a-1	7.5Y3/2 オリーブ黒色	砂質シルト	緑灰色土を含む。
	2a-2	7.5Y3/2 オリーブ黒色	砂質シルト	暗緑灰色土を含む。
	2a-3	7.5GY3/1 暗緑灰色	砂質シルト	
	2a	2.5GY3/1 暗オリーブ灰色	砂質シルト	黒色土を多く含む。
	2b	2.5GY4/1 暗緑灰色	シルト質砂	
	2c	2.5GY5/1 緑オリーブ灰色	シルト	緑灰色土を含む。
	2d	10YR4/4 褐色	シルト	
	2e	5GY4/1 暗オリーブ灰色	シルト質砂	
	2f	2.5GY2/1 暗オリーブ灰色	砂質シルト	酸化鉄を多量に含む。
	2g	7.5GY2/1 暗緑灰色	砂質シルト	
	2h	5GY3/1 暗オリーブ灰色	シルト質砂	酸化鉄を多量に含む。
	3	2.5GY2/1 黒色	シルト質砂	緑灰色シルトを含む。
	4a	2.5GY3/1 暗オリーブ灰色	粘土質砂	植物遺存体を多く含む。
	4b	2.5Y3/2 黒褐色	粘土	植物遺存体を縞状に含む。
	5a	5GY3/1 暗オリーブ灰色	粘土	植物遺存体を含み、縞状に堆積
	5b	2.5GY4/1 暗オリーブ灰色	中砂	黒色粘土をブロック状に含む。
	5c	10YR4/1 暗褐灰色	細砂	
	6	7.5GY4/1 暗緑灰色	細砂	
Pit 3	1	10YR3/3 褐色	シルト	IV層の土を少量含む。

第18図　第120次調査区断面図（1/60）



図版番号	登録番号	種別・器形	出土地点 出土遺構	層位	法量(cm) 器高	口径	底径	外面調整 口縁部	体部	底部	内面調整 口縁部	体部	底部	備考	写真図版
1	D－51	赤焼き土器・高台付坏	旧置土層		4.8	14.0	8.3		ロクロナデ	回転糸切り		ロクロナデ		残存6/6	31－11
2	D－52	赤焼き土器・高台付坏	旧溝		5.1	14.8	8.2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ		残存3/4	31－12
3	D－53	土師器・甕	SD142	1	(4.4)		7		ロクロナデ	回転糸切り		ロクロナデ		内外面黒色	31－10

図版番号	登録番号	種別・器形	出土地点 出土遺構	層位	凸凹 外面調整	凹凸 内面調整	備考	写真図版
4	G－64	平瓦	SA1775		斜位縄叩き→一部ケズリ	布目板・布目板・端部にケズリ		
5	G－66	平瓦	SX1294	2b	縄叩き、ナデ	模骨痕・布目板・端部にケズリ		
6	G－65	平瓦	SX1294	3	縄叩き、ナデ	模骨痕・布目板・端部にケズリ		

図版番号	登録番号	種別・器形	出土地点 出土遺構	層位	法量(cm)	その他	写真図版
7	P－32	土製品・土錘	SX1294	4a	全長4.7 直径1.5		
8	P－35	土製品・炉壁	SX1294			黒色の付着物あり	

第19図　第119・120次調査区出土遺物

遺物は、陶器片、瓦片、土師質の土器片、不明な土製品が各々1点出土している。

SA1785 溝跡を切っている。

SD1818 溝跡　上幅50～80cmの溝跡である。方向はE－2°－Nで、検出した総長は1.1mである。遺構の検出に留めている。

SD1789 溝跡、SD1818 溝跡に切られている。

SK1792 土坑　東西0.50m以上、南北1.45mのやや歪んだ土坑で、深さは16cm程である。底面はほぼ平坦で、壁は極めて緩やかに立ち上がる。堆積土は暗褐色シルト、粘土質シルト、褐色シルト質粘土である。

遺物は土師器と瓦の小片が各々1点出土している。

SK1793 土坑　東西0.27m以上、南北1.58m以上の土坑で、深さは18cm以上である。壁は極めて緩やかに立ち上がる。堆積土は黒褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

SX1794　調査区の南端で検出したが、平面形や規模は不明である。下層の状況を検討するため、南北1.5m×東西1mの範囲のみを掘り下げた。堆積土は第2層以下がグライ化している。底面は5層下面である可能性があるが、断定できなかった。

遺物は、第2層から黒色の鉱滓が付着したP－35炉壁（第19図8）、N－59椀形滓、黒色のN－60鉱滓、凹面は模骨痕が明瞭で、凸面は縄叩きのちすり消し痕跡のあるG－86平瓦（第19図5）、F－79丸瓦、安山岩製で刃部のある石器K－212、P－33埴輪片、土製の不明品P－34、第4層からはP－32土錘（第19図7）などが出土した。この他に第1層から第6層上面までの層中から土師器、須恵器、瓦の小片が出土している。

3．ま　と　め

郡山廃寺の範囲を明らかにするために、第119次、第120次調査を実施した。第119次調査A区からはSA1775材木列が、B区からはSA177材木列、第120次調査からはSA1785材木列が検出された。形状や検出された位置から、一連の遺構としての寺院の北、東辺を区画していた可能性が強い。これにより中枢伽藍を含む寺院の東西は約120m、南北は132m以上となり、さらに南に広がることが明らかとなった。来年度も継続的な調査を実施し、区画の南北長や南辺の位置について明らかにしていきたい。また第119次調査B区のSA177材木列南端で掘り方の幅が広くなり、底面も1m程深く、柱痕跡も直径25cmと材木列内部の他の柱痕跡に比べ太くなっている。柱の形状や規模からは建物跡の柱となる可能性がある。区画の材木塀にとり付いて、門等の建物があったことが考えられよう。今後、周辺を含め遺構の確認を行う必要がある。

またこれらの材木列の外側には、溝跡や溝状の落ち込みが確認されている。しかし第119次調査B区のSD142溝跡の上層からはロクロ使用の土師器D－51壺が出土していることや、第119次調査A区では平面的には溝状の落ち込み認められるが、断面観察からは溝跡の堆積というよりは自然地形の変化のようにしか観察されなかった。また昭和61年度の第62次調査で検出され、北辺としたSA830材木列の北を平行するSD828溝跡についても、出土遺物に検討を要する点があることから、さらなる調査成果の蓄積を待って、材木列とともに寺院の区画となるかについて慎重に検討していきたい。

VI　第121次発掘調査

1．調　査　経　過

第121次調査区は、方四町Ⅱ期官衙の南辺中央よりやや東に寄った地点である。昨年度の第115次、第116次調査により方四町Ⅱ期官衙の中枢部は、正殿（SB1250）、石敷遺構（SX24）、石組池（SX1235）、SB1555建物跡を中心とする数棟の建物跡と、それらを東西から挟む建物列（東列、西列）によって構成されると考えられた（註10）。よって今年度の調査は、この中枢部の建物跡による東列南端と外郭南辺との接続部分の遺構の様相を明らかにすることと、方四町Ⅱ期官衙の外郭大溝である SD35 溝跡から、木簡等の文字資料の出土により官衙の名称、機能、存続年代等の検討を可能にするために実施した。

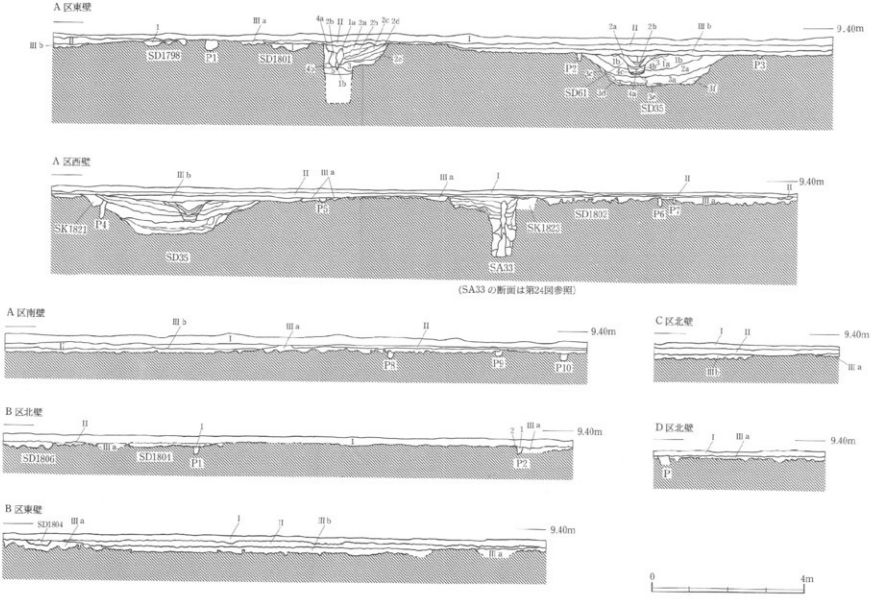
調査区は標高9.5m 程の水田と、仙台市所有地（旧水田）となっている。調査区は A、B、C 区を設定し、遺構の検出状況に応じ D 区を追加設定した。また A、B 区では、官衙の遺構検出面の上層に 2 時期の水田遺構があり、調査期間の調整のため、B 区の調査範囲を縮小した。遺構の様相が把握された平成10年11月21日に、周辺の西台畑遺跡ならびに郡山遺跡第124次調査（註11）と合同で現地説明会を実施した。

2．発見遺構・出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、材木列 1 列、掘立柱建物跡 1 棟、溝跡14条、土坑 6 基、小柱穴による建物跡 1 棟、同じく柱列 1 列、ピットなどである。これらの遺構は第Ⅳ層上面で検出されている。また上層の第Ⅱ層ないし第Ⅲ層では水田跡が発見された。これらの遺構のうち官衙と関わりのある遺構について報告し、それらより年代の新しくなる遺構については略述する。

SA33材木列　上幅140～180cmの布掘りで、中段において幅が狭くなり70～100cmとなっている。掘り方の北壁は直立気味となり、南壁は上部が浅くゆるやかに傾斜し、中程で直立気味となる。その中央にほぼ一直線に直径12～30cmの材木痕跡を49本分検出した。掘り方底部では直径30cm程度の材木痕跡の木質部が残存していると推定される。検出した布掘りの総長は15.1mで、方向はE－0°－S（真東西方向）、さらに東西方向に延びている。掘り方埋土は

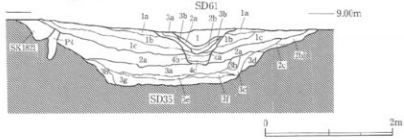
第20図　第121次調査区位置図


A 区東壁
9.40m
SD1798
P1
SD1801
P2
SD61
SD35
P3
A 区西壁
9.40m
SK1821
P4
SD35
P5
SA33
SK1823
SD1802
P6
P7
(SA33 の断面は第24図参照)
A 区南壁
9.40m
P8
P9
P10
C 区北壁
9.40m
B 区北壁
9.40m
SD1806
SD1804
P1
P2
D 区北壁
9.40m
P
B 区東壁
SD1804
9.40m
0
4m

A区東壁・西壁

遺構名	層位	土色	土性	備考
基本層位	I	10YR4/2 灰黄褐色	駄土質シルト	腐下面に酸化鉄
	II	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	腐下面に酸化鉄
	III a	10YR3/3 暗褐色	駄土質シルト	黄褐色シルトを多く含む。
	III b	10YR5/1 褐灰色	シルト質粘土	I 層に同じ
SD1708	1	10YR4/2 灰黄褐色	駄 土	黄褐色シルトを含む。
Pit 1	1	10YR2/2 黒褐色	駄土質シルト	
SD1601	1	10YR4/2 灰黄褐色	駄 土	黄褐色シルトを含む。
SA33	1a	10YR2/3 黒褐色	シルト質粘土	材痕跡
	1b	10YR2/3 黒褐色	駄 土	材痕跡
	2a	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	黄褐色シルトを多く含む。
	2b	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	黄褐色シルト、にぶい黄橙色駄土を含む。
	2c	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	黄褐色シルト、にぶい黄橙色駄土をブロック状に少量含む。
	2d	10YR6/3 にぶい黄橙色	駄 土	
	2e	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	
	3	10YR5/2 灰黄褐色	駄 土	にぶい黄褐色土を含む。
	4a	10YR5/6 黄褐色	シルト	にぶい黄褐色土を多く含む。
	4b	10YR5/6 黄褐色	シルト	にぶい黄褐色土を少しづつ含む。
	5	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄を多く含む。
SD61	1	10YR3/2 黒褐色	駄土質シルト	灰白色火山灰、灰黄褐色駄土質シルトを含む。
	2a	10YR4/1 褐灰色	駄 土	
	2b	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	炭化物粒、火山灰を少量含む。
	3	10YR4/2 灰黄褐色	駄土質シルト	火山灰を少量含む。
	4a	10YR5/1 褐灰色	駄 土	
	4b	10YR4/2 灰黄褐色	駄土質シルト	
	4c	10YR6/1 褐灰色	駄 土	炭化物をわずかに含む。
	5		酸化鉄の集積	
Pit 3	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	
SK1821	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	黄褐色シルトをブロック状に含む。
Pit 4	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物を含む。
SD3b	1a	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	最上面に灰白色火山灰。
	1b	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物粒をわずかに含む。
	1c	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物粒をまばらに少量含む。
	2a	10YR5/2 灰黄褐色	駄土質シルト	酸化鉄を斑状に含む。
	2b	10YR5/2 灰黄褐色	駄土質シルト	黄褐色シルトを多く含む。
	2c	10YR5/2 灰黄褐色	駄土質シルト	黄褐色シルトを斑状に含む。
	3a	10YR6/2 灰黄褐色	駄 土	細砂を多く含む。
	3b	10YR6/2 灰黄褐色	駄 土	黄褐色シルトをわずかに含む。
	3c	10YR6/2 灰黄褐色	駄 土	黄褐色シルトをブロックで含む。
	3d	10YR6/2 灰黄褐色	駄 土	黄褐色シルトをブロックで多く含む。
	3e	10YR6/2 灰黄褐色	駄 土	炭化物粒を微量に含む。
	3f	10YR6/2 灰黄褐色	駄 土	にぶい黄褐色土を斑状に含む。
	3g	10YR7/2 灰黄褐色	駄 土	炭化物を含む。
	3h	10YR7/2 灰黄褐色	駄 土	酸化鉄を全体的に含む。
Pit 5	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	

SD35・SD61 断面（調査区西壁断面より）



A区西壁・南壁

遺構名	層位	土色	土性	備考
SK1822	1	10YR5/1 褐灰色	シルト質粘土	マンガン粒を多く含む。
SD1602	1	10YR4/3 灰黄褐色	駄 土	黄褐色シルト、マンガン粒を含む。
Pit 6	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	
Pit 7	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	
Pit 8	1	10YR2/2 黒褐色	駄土質シルト	
Pit 9	1	10YR2/2 黒褐色	駄土質シルト	
Pit10	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	

B区東壁

基本層位				
	I	7.5Y5/1 灰色	駄 土	酸化鉄を含む。
	II	10YR5/1 褐灰色	駄 土	酸化鉄を多量に含む。
	III a	10YR4/1 褐灰色	駄 土	黄橙色駄土を含む。
	III b	10YR5/1 褐灰色	駄 土	酸化鉄を含む。
SD1604	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	マンガン粒・酸化鉄を含む。

B区北壁

SD1606	1	10YR3/2 黒褐色	駄土質シルト	黄橙色シルト質駄土をブロック状に含む。
SD1804	1	10YR5/1 褐灰色	駄 土	黄橙色シルト質駄土をブロック状に含む。
Pit 1	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	
Pit 2	1	10YR5/1 褐灰色	駄土質シルト	
	2	10YR5/1 褐灰色	駄土質シルト	黄橙色シルト質粘土を含む・

D区北壁

基本層位	I	10YR4/2 灰黄褐色	駄土質シルト	酸化鉄を含む。
	III a	10YR3/3 暗褐色	駄土質シルト	明黄褐色シルトをブロック状に少量含む。

第22図　第121次調査区中断面

灰黄褐色、黄褐色シルト、灰黄色砂質シルトなどであるが、材木痕跡の南と北では堆積土の特徴が異なる箇所がある。

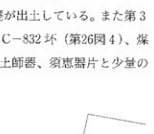
遺物は掘り方埋土中より、内面黒色処理された土師器C－828坏（第26図1）の他、土師器坏、甕片と須恵器甕、壷片、平瓦片、少量の鉄滓が出土している。

SK1823土坑を切っている。

SD35 溝跡　上幅390～480cm、底面幅100～190cm、深さ80～85cm、断面形は扁平な逆台形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、北壁にのみ土坑状の段を有する箇所があり、底面は平坦である。方向はE－1'－Sで、検出した総長は15.5mである。溝の最深部中央からSA33材木列の材痕跡までほぼ8.2mを計る。堆積土は大別して3層に分けられ、第1層はにぶい黄褐色シルト、第2層は灰黄褐色粘土質シルト、第3層は灰黄褐色粘土である。第2層上面で炭化物の集積や土坑、ピットの掘り込みが確認される箇所があり、第1層から第2層の堆積までの間に第2層上面が乾燥化していた時期があると推定される。

遺物は、第1層中から内面黒色処理され、外面の段が明瞭な土師器C－826坏（第26図2）、内面はヘラミガキが施されるが黒色処理されず、外面のヘラケズリが顕著な土師器C－829坏（第26図5）、底部が欠損した須恵器E－417高台付坏（第26図6）、棒状の鉄製品N－62不明品、第2層上面から表面が発泡あるいは黒色にガラス化した指頭状のN－87鉱滓（巻頭図版2）、棒状の鉄製品N－86不明品、第2層から炉壁の付着したN－84鉄滓、さらに第1、2層中からは内面黒色処理され、外面の段が明瞭な土師器C－827坏、内面が摩滅し、外面底部のヘラケズリが顕著な土師器C－830坏、外面ヘラケズリののちヘラミガキの施された土師器C－831甕が出土している。また第3層上面から焼け面のあるK－230礫（写真図版31－5）、第3層中からは内外面摩滅したC－832坏（第26図4）、煤の付着した球形の土師器C－834甕などが出土している。その他堆積土中からは多量の土師器、須恵器片と少量の瓦、羽口片が出土している。

SB1790 掘立柱建物跡　梁行1間（総長2.30m、柱間寸法230cm）、桁行3間（総長8.94m、柱間寸法260～320cm）の東西棟の建物跡と推定され、方向は南桁行でE－0°－S（真東西方向）である。柱穴は50～70×50～90cmのやや歪んだ隅丸方形で、柱痕跡は18～30cmである。柱穴の深さは50～55cmで、柱痕跡の部分のみ底面より5～10cm程深くなっている。埋土は、黄褐色シルトや暗褐色シルト、暗褐色粘土質シルトなどである。



第21図　SB1790 模式図

遺物は、N2E1、N2E4柱穴掘り方より土師器甕片が少量と、N1E4柱穴掘り方より弥生土器片が3点出土した。

SD1802・1819溝跡、SK1823土坑を切っている。

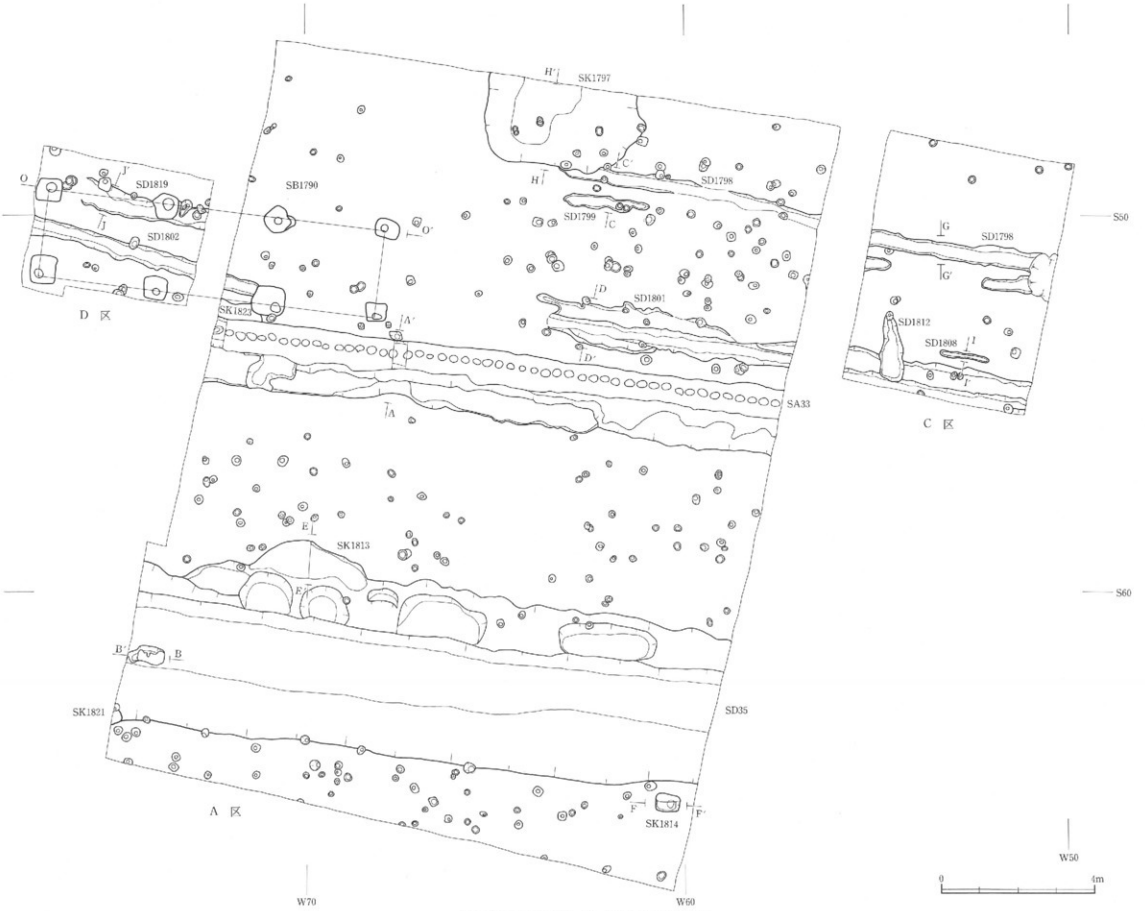
SD1798 溝跡　幅34～50cm、底面幅24～32cm、深さ0～8cm、断面形は扁平なU字形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸がある。一部で底面の痕跡のみとなる箇所がある。方向はE－4°－Sで、検出した総長は13.4mである。堆積土は褐灰色、灰黄褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

SK1797土坑を切っている。

SD1799 溝跡　上幅18～45cm、底面幅10～30cm、深さ2～6cm、断面形は扁平なU字形の溝跡である。壁はきわめて緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はE－4°－Sで、削平され断続的ではあるが検出した総長は12.5mである。堆積土は褐灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

SD1801 溝跡　上幅42～130cm、底面幅25～30cm、深さ9～16cm、断面形は扁平なU字形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸がある。溝の端部が平場状に浅くなり、中央のみが深くなっている。方向はE－2°－Sで、検出した総長は13.2mである。堆積土は褐灰色、灰黄褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

SD1812溝跡を切っている。



第24図　第121次調査A・C・D区平面図（1/100）

SB1790 東西セクション

遺構名	層位	土色	土性	備考
S2E4	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	黄褐色シルトをわずかに含む。
	2	10YR3/6 黄褐色	シルト	暗褐色粘土質シルトと砂質シルトを含む。
	3	10YR5/6 黄褐色	シルト	暗褐色粘土質シルトを少量含む。
	4	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	
S2E3	1a	10YR3/4 暗褐色	シルト	
	1b	2.5Y5/3 黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む。
	2a	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄褐色シルトをブロック状に含む。
	2b	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄褐色シルトをブロック状に多く含む。
	3a	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	暗褐色シルトを小ブロックでわずかに含む。
	3b	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	暗褐色シルトを薄状に含む。
S2E2	1a	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	
	1b	10YR6/3 にぶい黄橙色	砂質シルト	直当近くに酸化鉄を含む。
	2a	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色砂質シルトを少量含む。
	2b	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色砂質シルトを多量に含む。
	3a	10YR5/6 黄褐色	シルト	暗褐色粘土質シルトを小ブロックで含む。
	3b	10YR5/6 黄褐色	シルト	暗褐色粘土質シルトを斑状に含む。
S2E1	1a	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	
	1b	10YR6/3 にぶい黄橙色	粘土質シルト	底面に鉄化鉄を含む。
	2	10YR5/6 黄褐色	シルト	暗褐色粘土質シルトを小ブロックでわずかに含む。
	2a	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	黄褐色シルトを小ブロックでわずかに含む。
	3b	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色砂一をブロックで含む。
	4	10YR5/6 黄褐色	シルト	暗褐色土を小ブロックでわずかに含む。

0 2m

第23図　SB1790 掘立柱建物跡断面図（1/60）

SD1802 溝跡　上幅25～55cm、底面幅20～30cm、深さ2.5～9cm、断面形は扁平なU字形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸がある。方向はE－5°－Sで、検出した総長は6.9mである。堆積土は灰黄褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

SB1790 掘立柱建物跡を切っている。

SD1808 溝跡　上幅12～16cm、底面幅7～8cm、深さ3～4cm、断面形はU字形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はE－1°－Sで、検出した総長は1.3mである。堆積土は灰黄褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

SD1812 溝跡　上幅22～63cm、底面幅10～40cm、深さ10～22cm、断面形は扁平な逆台形の溝跡である。壁は直線的に立ち上がり、底面にはほぼ平坦である。溝の北端部がピット状に深くなっている。方向はN－3°－Eで、検出した総長は1.85mである。堆積土は黒褐色粘土、明黄褐色シルト質粘土である。遺物は出土しなかった。

SD1801 溝跡に切られている。

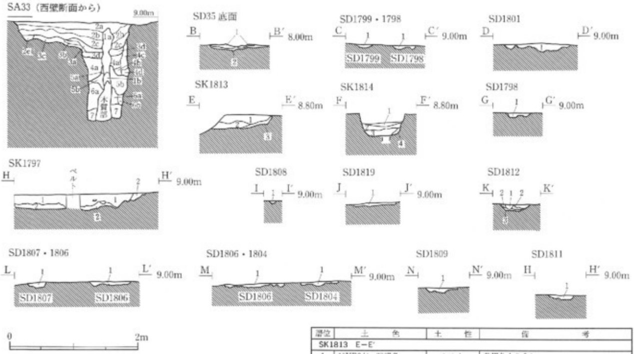
SD1819 溝跡　上幅52～70cm、底面幅30～60cm、深さ3～14cm、断面形は扁平な逆台形の溝跡である。壁は直線的に立ち上がり、底面にはやや凹凸がある。方向はE－7°－Sで、検出した総長は3.3mである。堆積土は灰黄褐色粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

SB1790 掘立柱建物跡に切られている。

SK1797 土坑　東西4.2m、南北2.2m以上のやや歪んだ土坑で、深さは19～25cm程である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は褐灰色、にぶい黄橙色粘土である。

遺物は、第1層中からは土師器坏、甕片、須恵器甕片、不明な鉄製品、焼け面のある礫、炭化物などが少量と、第2層からも両面黒色処理された土師器坏片、須恵器甕片が少量出土している。

SD1798 溝跡に切られている。



遺構名	層位	土色	土性	備考
SA33	1a	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	黄褐色シルトを斑状に含む。
	1b	10YR3/2 黒褐色	粘土	上部に酸化鉄集積
	2a	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	黄褐色シルト、マンガン粒を含む。
	2b	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	黄褐色シルトを多く含む。
	2c	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	黄褐色シルトを多量に含む。
	3a	10YR4/1 褐灰色	粘土	黄褐色シルトを含む。
	3b	10YR4/1 褐灰色	粘土	
	3c	10YR6/3 にぶい黄橙色	砂質シルト	層下面に酸化鉄含む。
	3d	10YR4/1 褐灰色	粘土	層下面に酸化鉄集積。
	4a	10YR5/6 黄褐色	シルト	暗褐色粘土質シルトを多く含む。
	4b	10YR5/6 黄褐色	シルト	暗褐色粘土質シルトを少量含む。
	4c	10YR5/6 黄褐色	シルト	暗褐色粘土質シルトをわずかに含む。
	4d	10YR7/2 にぶい黄橙色	砂質シルト	
	5a	10YR4/1 褐灰色	粘土	
	5b	10YR7/2 にぶい黄橙色	粘土	黒褐色粘土をブロックで多く含む。
	6a	2.5Y7/2 灰黄色	砂質シルト	黒褐色粘土を小ブロックでわずかに含む。
	6b	2.5Y7/2 灰黄色	砂質シルト	
	7	10YR5/1 褐灰色	砂質シルト	グライ化
SD35 底面 B−B′				
	1	10YR2/3 黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄・炭化物を多量に含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄・炭化物を含む。
SD1799・1798 C-C′				
SD1798	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	炭化物を少量含む。
SD1799	1	10YR5/1 褐灰色	粘土	黄褐色粘土を少量含む。
SD1801 D−D′				
	1	10YR5/1 褐灰色	粘土	

層位	土色	土性	備考
SK1813 E−E′			
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄褐色土を含む。
2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	
3	10YR5/6 黄褐色	シルト	暗褐色土を少し含む。
SK1814 F−F′			
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	
2	10YR6/3 にぶい黄橙色	砂質シルト	下層近くに黒褐色土を含む。
3	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	
4	10YR5/6 黄褐色	シルト	
SD1798 G−G′			
1	10YR4/1 褐灰色	粘土	浅黄橙色粘土を多量に含む。
SK1797 H−H′			
1	10YR5/1 褐灰色	粘土	酸化鉄、マンガン粒を含む。
2	10YR6/4 にぶい黄橙色	粘土	褐灰色粘土をまだらに含む。
SD1808 I−I′			
1	10YR6/2 灰黄褐色	粘土	浅黄橙色土を多量に含む。
SD1819 J−J′			
1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	
SD1812 K−K′			
1	10YR3/2 黒褐色	粘土	
2	10YR3/1 黒褐色	粘土	
3	10YR6/6 明黄橙色	シルト質粘土	
SD1807・1806 L−L′			
SD1806 1	10YR4/1 褐灰色	粘土	
SD1807 1	10YR4/1 褐灰色	粘土	
SD1806・1804 M−M′			
SD1804 1	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	
SD1806 1	10YR4/1 褐灰色	粘土	
SD1809 N−N′			
1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
B区 SD1811 H−H′			
1	10YR3/1 黒褐色	粘土	

第25図　第121次調査区遺構断面図（1/60）

SK1813 土坑　東西3.1m、南北1.0m 以上のやや歪んだ土坑と推定され、深さは15〜20cm程である。底面はほぼ平坦で、壁は直線的に立ち上がる。堆積土は暗褐色、灰黄褐色、黄褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

SD35 溝跡に切られている。

SK1814 土坑　長軸0.65m、短軸0.46m の隅丸長方形を呈する土坑で、深さは34cm程である。底面はほぼ平坦、壁は直立気味に立ち上がる。方向は E−3°−N で、底面よりピットが検出されている。堆積土は暗褐色、黄褐色シルト、にぶい黄橙色砂質シルト、黒褐色粘土質シルトである。

遺物は、内面黒色処理された土師器坏片が 3 点出土している。

SK1821 土坑　規模、平面形は不明であるが、深さ30cm程でさらに深くなる可能性がある。堆積土はにぶい黄褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

SD35 溝跡第２層上面から掘り込まれ、同様に第２層上面から掘り込まれたピットを切っている。

SK1823 土坑　東西1.15m 以上、南北0.48m 以上の土坑と推定される。周辺の遺構との重複が多いため、検出に留めている。

SA33 材木列、SB1790 掘立柱建物跡に切られている。

SD1804 溝跡　上幅50～80cm、底面幅40～68cm、深さ２～８cm、断面形は扁平な逆台形の溝跡である。壁の立ち上がりは一定せず、底面には凹凸がある。方向はＥ－17°－Ｓで、検出した総長は12m で、さらに東西に延びている。堆積土は褐灰色粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

SD1806 溝跡　上幅48～138cm、底面幅40～130cm、深さ６～９cm、断面形や壁の立ち上がりは一定せず、底面には凹凸がある。方向はＥ－22°－Ｓで、検出した総長は15m で、さらに東西に延びている。堆積土は褐灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

SD1807 溝跡　上幅24～94cm、底面幅22～80cm、深さ７～８cm、断面形は逆台形の溝跡である。壁は直線的に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はＥ－25°－Ｓで、検出した総長は3.1m で、さらに西に延びている。堆積土はにぶい黄褐色粘土質シルトである。

遺物は、土師器甕片が１点と磨面のある礫が１点出土している。

SD1809 溝跡　上幅20～55cm、底面幅14～38cm、深さ３～７cm、断面形は舟底形の溝跡である。壁は直線的に立ち上がり、底面には凹凸がある。溝の方向は一定せず、蛇行している。検出した総長は2.3m である。堆積土はにぶい黄褐色粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

SD1811 溝跡　上幅24～55cm、底面幅18～32cm、深さ４～９cm、断面形は扁平な逆台形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面にはやや凹凸がある。方向はＮ－53°－Ｅで、検出した総長は2.1m である。堆積土は黒褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

SK1803 土坑　長軸0.90m、短軸0.57m の隅丸長方形を呈する土坑で、西壁が舌状に突出している。深さは10～22cmで、底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がり、方向はＥ－0°－Ｓである。堆積土は黒褐色、暗灰黄色粘土である。

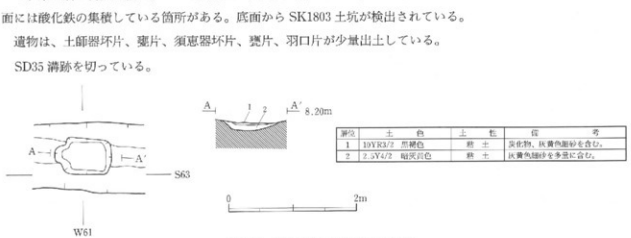
遺物は、馬の頸部が出土している。

SD35 溝跡を切っている。

SD61 溝跡　上幅110～130cm、底面幅30～40cm、深さ46～58cm、断面形は逆台形の溝跡である。壁は底面から中程までは直立気味に立ち上がり、中程から上端にかけては直線的に開くように立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、方向はＥ－0°－Ｓである。検出した総長は15.5m で、さらに東西に延びている。堆積土は、第１層が黒褐色粘土質シルト、第２層が褐灰色粘土、シルト質粘土で火山灰を含んでいる。また第３層は灰黄褐色粘土質シルトなどで、底面には酸化鉄の集積している箇所がある。底面から SK1803 土坑が検出されている。

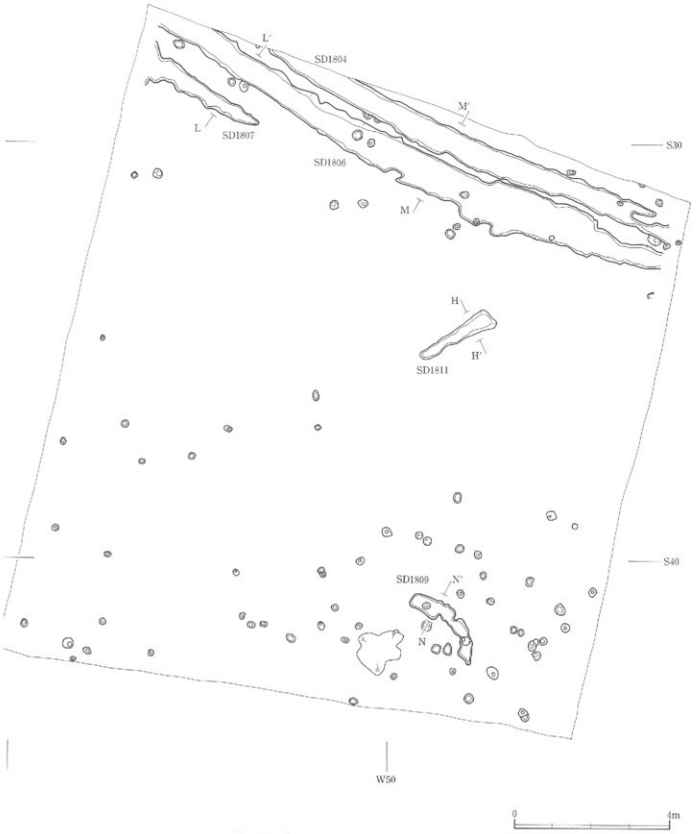
遺物は、土師器坏片、甕片、須恵器坏片、甕片、羽口片が少量出土している。

SD35 溝跡を切っている。

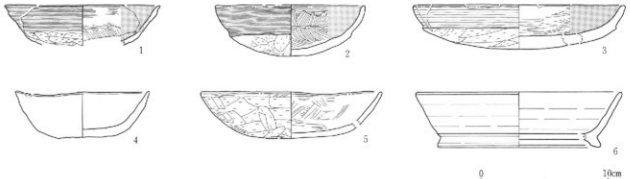


層位	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	粘土	炭化物、灰黄色細砂を含む。
2	2.5Y4/2 暗灰黄色	粘土	灰黄色細砂を多量に含む。

第26図　SK1803 平・断面図（1/60）



第27図　第121次調査 B 区平面図（1/100）



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点 出土遺構	出土地点 層位	法量(cm) 器高	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	外面調整 口縁部	外面調整 体部	外面調整 底部	内面調整 口縁部	内面調整 体部	備考	写真図版
1	C-828	土師器	坏	SA33	掘り方埋土	(3.15)	(12.2)		ヨコナデ	ヘラケズリ		ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒色処理残存1/6	
2	C-826	土師器	坏	SD35	1	4.1	11.9		ヨコナデ	ヘラケズリ		ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒色処理残存1/3	31－13
3	C-825	土師器	坏	SD35	1	3.5	(16.8)	2.7	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ミガキ	ミガキ	黒色処理残存3/4	31－16
4	C-832	土師器	坏	SD35	3	3.7	(16.6)							内面摩滅残存1/3	31－15
5	C-829	土師器	坏	SD35	1	3.7	14.2	3.9	ナデ・ヘラミガキ	ヘラケズリ		ヘラミガキ	ヘラミガキ	残存1/2	31－14
6	E-417	須恵器	高台付坏	SD35	1	4.4	16.4	13.9	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ	残存1/6	

第28図　第121次調査区出土遺物

これらの他に以下の遺構を検出した。

(1) 小柱穴による建物、塀跡など：第Ⅳ層上面で検出されているが、第Ⅲ層の水田遺構よりは遡る年代の遺構群である。SD61溝跡を境にして南北に建物や塀跡が広がっている。

(2) Ⅲ層水田跡：A区ならびにB区で畦畔状の高まりが2条検出されている。第Ⅲb層を耕作土としている。第Ⅲb層中より土師器、須恵器、瓦の小破片の他に、青磁Ⅰ－10、11碗、中世陶器Ⅰ－41 壺、Ⅰ－42 摺り鉢、Ⅰ－43 壺の小破片と、ロクロ使用の土師器片が2点、鉄滓と羽口片が少量出土している。

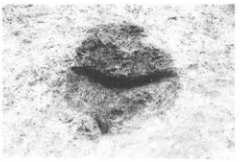
(3) Ⅱ層水田跡：B区で畦畔状の高まりが2条検出している。第Ⅱ層を耕作土としている。A区においては畦畔状の高まりは検出されなかったが、第Ⅱ層はA区にも分布しており水田跡が延びていたと考えられる。第Ⅱ層中より土師器、須恵器、羽口片が少量出土している。

3．ま　と　め

発見された遺構は、材木列1列、掘立柱建物跡1棟、溝跡14条、土坑6基や、小柱穴による建物跡、柱列、ピット、水田跡などである。この調査区は、方四町Ⅱ期官衙の中枢部の建物跡による東列南端の遺構の様相を明らかにし、外郭大溝であるSD35溝跡の状況を把握するため発掘調査を実施した。

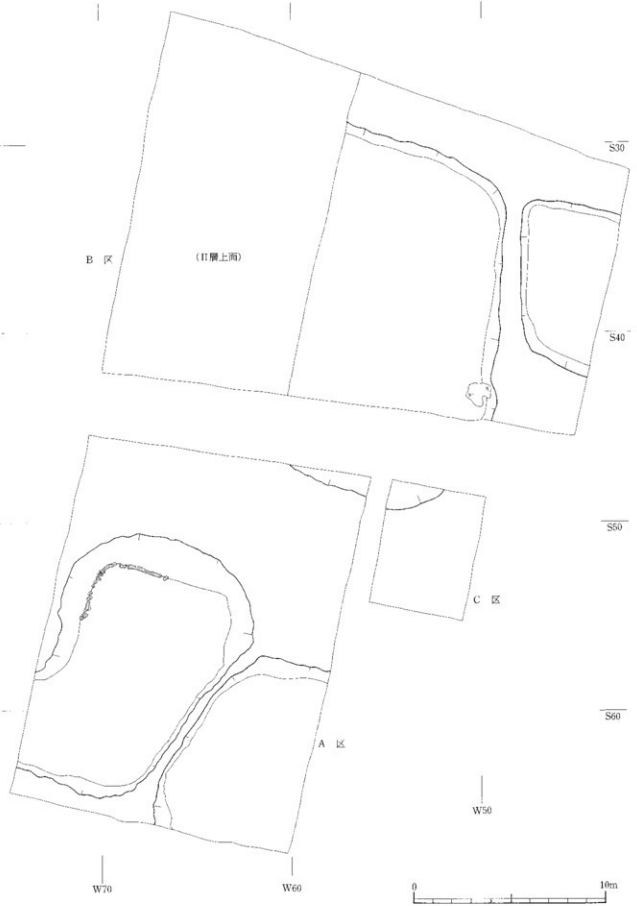
Ⅱ期官衙の遺構については、中枢を構成する建物列の南からは、建物跡や塀などは発見されず、官衙の中にあって空閑地になっていることが明らかになった。また外郭大溝であるSD35溝跡からも、土器類を含めた遺物の出土量が他の調査区と比べて少なかった。また外郭大溝の堆積過程を検討する上で、新しい知見を得た。溝跡の堆積状況は大別して第1～3層まで徐々に自然堆積としたと考えられるが、第2層上面で掘り込まれたピット（註12）があることや、炭化物や鉱滓（N－87）の集積した箇所があること、人為的に埋められた土層が一部観察されたことなどから、第2層上面は時間的な長さは明らかではないが、乾燥していた時期があると想定される。そのような状況の中で鉱滓などを残渣させる作業を大溝の中で行なっていた可能性がある。また大溝の北側にのみ、形状が複数の土坑が掘り込まれたような箇所があり、大溝開削時、あるいは堆積途中に何らかの理由で掘り込みが行なわれていたと考えられる。

外郭の材木列については掘り方の南側のみが一定の深さのところで広

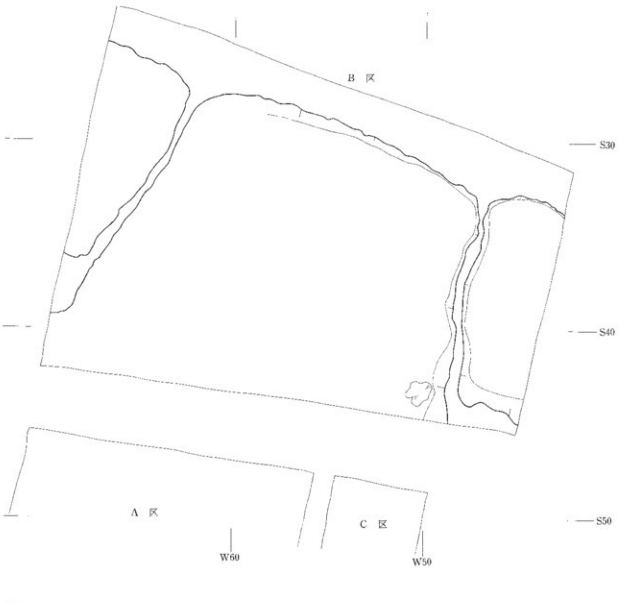


SD35 溝跡内の炭化物・鉱滓

第29図　第121次調査建物跡・柱列跡配置図



第30図　第121次調査区II層水田跡

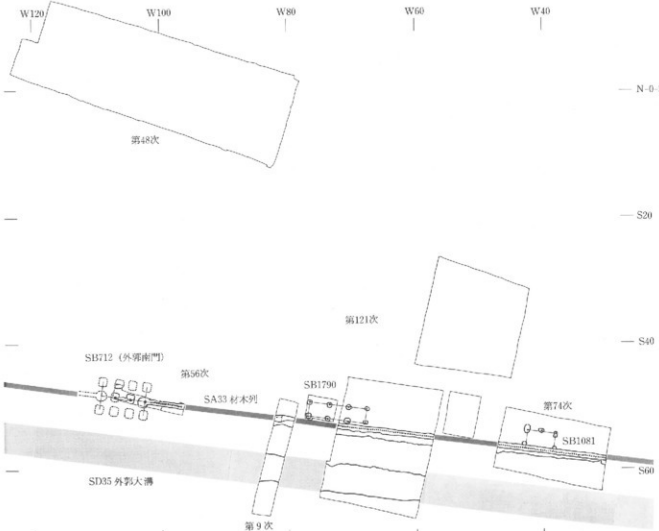


第31図　第121次調査区II層水田跡

がっている。堆積土の状況からこの広がりは、抜き取りではなく、材木の設置段階で掘られた掘り方である。第121次調査区内では一定区間ごとに際の傾斜や中段までの深さに違いが見られ、材木の設置時の工程順を示している可能性がある。

SA33 材木列に接するように発見された SB1790 掘立柱建物跡は、梁行 1 間、桁行 3 間というきわめて特異な形態の建物跡である。発見された位置からは外郭の材木列と同時期に存在したと推定される。なお東に位置する第74次調査でも、材木列に沿って小規模な柱列状の SB1081 構造物(柱13)が発見されている。この遺構は単体で地上に建っていたというよりも、材木列に付設されていると考えられた。今回の調査区の SB1790 掘立柱建物跡は、独自でも地上に建っている構造であり、材木列に接して建っていた建物と想定しておく。なお官衙内にあってどのような機能を果たしていた建物なのかは、明らかに出来なかった。

官衙に関わる遺構ではないが、SD61 溝跡は外郭大溝の中央部にほぼ重複するように検出された。SD61 溝跡は小規模ではあるが、逆台形で整然とした形態の溝跡である。外郭大構上にあることや、周辺に小規模な柱穴による建



第32図　方四町Ⅱ期官衙南辺遺構配置図

物が建つ可能性のあることから、土地の区画溝となっていたと考えられる。またこの溝跡の底面から検出されたSK1803土坑からは、馬の顎部が出土した。他の部位の骨が出土していないことから人為的に埋設された可能性がある。

この調査区からは他に2時期の水田跡が検出された。出土した遺物は小破片でかつ量が少ないため、年代を特定することができなかった。ただし官衙の外郭大溝であるSD35溝跡の第1層上面に灰白色火山灰が堆積し、この火山灰は10世紀前半の年代が想定されている（註14）。したがって上層の水田跡は、それより新しい年代ということになるが、隣接する第65次調査N区からは灰白色火山灰の堆積するⅢ層水田跡が検出されている。その水田跡からは古代の遺物の他に、14～15世紀代の遺物が含まれていた。今回の調査区における2時期の水田跡には、灰白色火山灰は含まれておらず、第65次調査N区のⅢ層水田跡よりも新しい年代が想定されるであろう。また前述したSD61溝跡やそれを境にして建っている建物跡や塀跡も同様の年代幅の中で見ておきたい。

Ⅶ　第122次発掘調査

1．調　査　経　過

第122次調査区は、方四町Ⅱ期官衙の中央やや東寄りに位置し、Ⅱ期官衙中枢部を構成する東建物列に接している。またこの地点は第51次、第77次、第83次、第107次、第115次調査などから、Ⅰ期官衙の中枢部と推定される約120m×約90mの範囲を区画する短辺のほぼ中央にも位置している。昨年度の第115次調査では、小規模な調査区(F、H区)による発掘調査しか実施しなかったが、そこからはⅠ期官衙の建物跡の間が14m程空いて、板塀や柱穴が発見されていた(註15)。これらの遺構がⅠ期官衙内の重要な門跡などになる可能性もあり、新ためて発掘調査を実施した次第である。

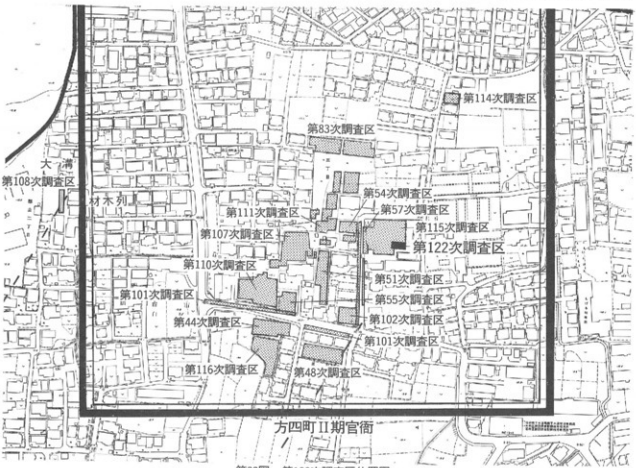
2．発見遺構・出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、板塀跡１条、掘立柱建物跡（門跡）１棟、溝跡１条、土坑２基、性格不明な遺構１の他、ピットなどである。これらの遺構は、耕作土直下の基本層位第Ⅲ層上面で検出されている。

SA1740 板塀跡　上幅50～74cm、底面幅23～28cm、深さ40～55cmの布掘り状の溝のなかに、幅（厚さ）３～７cm、長さ12～33cmの板材の痕跡がN－34°－E方向に並んで検出された。掘り方は断面形がU字形または逆台形で、底面は平坦である。埋土は黄褐色粘土質シルト、灰黄褐色シルト質粘土、黒褐色あるいは黄褐色粘土質シルトなどである。板材の痕跡の間には、一辺８～10cmの角材痕跡があり、210cm程間隔が開いている。遺物は出土しなかった。

SB1795 門跡、SD740 溝跡に切られている。

SB1795 門跡　長軸220～280cm、短軸76～100cmの楕円形を呈する掘り方が２基（北掘り方、南掘り方）あり、その中の両端から直径22～32cmの柱痕跡が検出された。北掘り方の北端にのみ柱に重複があり、直径30cmの柱痕跡が



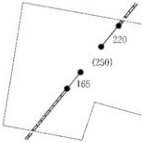
第33図　第122次調査区位置図

検出されている。掘り方間の距離は182cm、掘り方の中の柱痕跡間の距離は250cmである。

遺物は、掘り方埋土中から土師器片、鉄滓、礫が少量出土している。

SA1740 板塀跡を切っている。

SD740 溝跡　上幅44～48cm、底面幅25～39cm、深さ6～14cm、断面形は扁平なU字形の溝跡である。壁は直立気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はE—20°—Sで、検出した総長は7 mである。堆積土はにぶい黄褐色粘土である。遺物は出土しなかった。



第34図　SB1795　模式図

SA1740 板塀跡を切っている。

SK1816 土坑　東西2.16m、南北1.35m以上のやや歪んだ円形の土坑と推定され、深さは5～8cm程である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色、黄褐色土である。遺物は出土しなかった。

SK1822 土坑　長軸1.3m、短軸0.73mの隅丸長方形を呈する土坑で、深さは80cm程である。底面は摺り鉢状に落ち込んでおり、西壁は直立気味に、東壁は緩やかに立ち上がる。方向はN—39°—Wである。堆積土は明黄褐色粘土あるいは粘土質シルト、黒褐色粘土などである。遺物は出土しなかった。

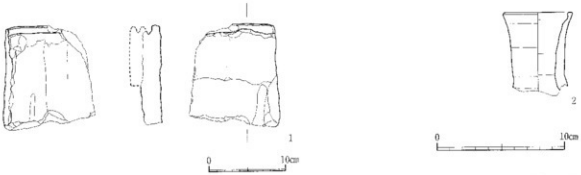
SB1795 門跡に切られている。

SX1674　上幅230cm以上、底面幅150cm以上、深さ50cm程の溝状の遺構である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はN—1°—Wで、検出した総長は7.2mである。第115次調査D区で北端を検出しており、そこまでを含めた南北長は20mとなる。さらに東と南に延びている。堆積土は、褐灰色粘土質シルト、灰黄褐色あるいは黒褐色粘土などである。第3層中に灰白色火山灰を含んでいる。

遺物は、第2層中から赤焼き土器D—56坏片の他に、堆積土中からロクロ不使用の土師器坏片、内面黒色処理されロクロ使用の土師器高台付坏片、須恵器甕片などが少量出土している。

3．ま　と　め

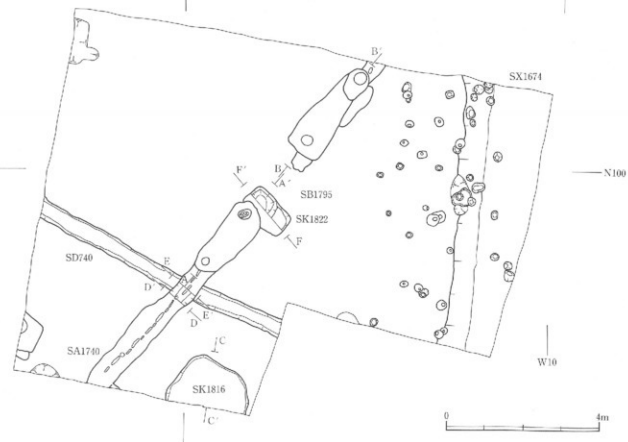
発掘調査した結果、昨年度の調査で断片的にしかとらえられなかった遺構の様相が明らかとなった。昨年度の第115次調査H区で検出されたP.1は、SB1975門跡の布掘り状の掘り方を切る柱穴で、門の柱跡となっていたと考えられる。SB1795門跡は布掘り状の掘り方の両端に柱痕跡が検出され、SA1740板塀の掘り方端部を切るよう掘り込まれている。門跡は柱4本によって構成され、布掘り間が空いている箇所は通り間口となっていたと推定される。通り間口以外の柱間が遮蔽されていたかどうかは不明であるが、形態的には棟門のような構造をしていた可能性が

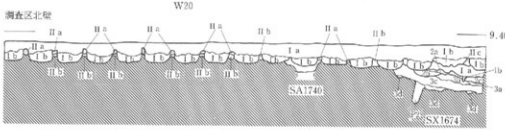


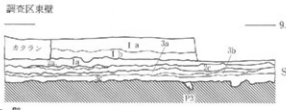
図版番号	登録番号	種別・器形	出土遺構・層位	凸面 外面調整	凹面 内面調整	備考	写真図版
1	G－84	釘平瓦	表土	斜格子叩き・ナデ・ケズリ	横骨痕・布目痕・ケズリ・ナデ		

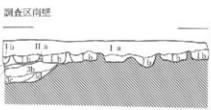
図版番号	登録番号	種別・器形	出土遺構・層位	法量(cm) 最高	口径	高径	外面調整 口縁部	体部	底径	内面調整 口縁部	体部	備考	写真図版
2	E－419	須恵器・平底	遺構	(6.3)	5.6		ロクロナデ			ロクロナデ			

第35図　第122次調査区出土遺物









北　壁

遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
基本土層位	I a	10YR2/4　褐色	シルト質粘土	耕作土
	I b	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	天地返し
	II a	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	
	II b	10YR8/4　にぶい黄橙色	粘土質シルト	
	II c	10YR5/2　灰黄褐色	粘土質シルト	
SA1740	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘　土	強黄橙色粘土粒を斑状に含む。
Pit 2	1	10YR5/2　灰黄褐色	粘　土	
SX1674	1a	10YR4/1　褐灰色	粘土質シルト	
	1b	10YR4/1　褐灰色	粘土質シルト	鳥状色粘土粒を少量含む。
	2a	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	
	2b	10YR6/4　浅黄橙色	シルト質粘土	
	3a	10YR6/1　褐灰色	粘　土	灰白色火山灰を斑状に含む。
	3b	10YR8/1　褐灰色	粘　土	
	3c	10YR6/1　褐灰色	粘　土	マンガン粒を多量に含む。
	3d	10YR5/1　褐灰色	粘　土	明黄褐色粘土を少量含む。

西　壁

遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
基本土層位	I a	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	耕作土
	I b	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	天地返し
	III	10YR7/4　にぶい黄橙色	シルト質粘土	
SB1760	1	10YR4/4　褐色	粘　土	柱痕跡
	2	10YR3/2　黒褐色	粘　土	明黄褐色粘土を斑状に含む。
Pit 1	1	10YR3/2　黒褐色	粘　土	明黄褐色粘土を少量含む。
SD740	1	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘　土	

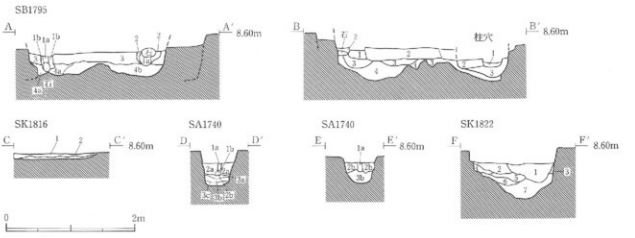
東　壁

遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
基本土層位	I a	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	耕作土
	I b	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	天地返し
	IV	10YR7/4　にぶい黄橙色	粘土質シルト	
SX1674	1a	10YR4/1　褐灰色	粘土質シルト	
	2a	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	
	2c	10YR7/4　にぶい黄橙色	シルト質粘土	
	3a	10YR6/1　褐灰色	粘　土	灰白色火山灰を斑状に含む。
	3b	10YR8/1　褐灰色	粘　土	
	3c	10YR5/1　褐灰色	粘　土	マンガン粒を多量に含む。
Pit 3	1	10YR5/1　褐灰色	粘　土	明黄褐色粘土を少量含む。

南　壁

遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
基本土層位	I a	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	耕作土
	I b	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	天地返し
	II a	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	
	II c	10YR5/2　灰黄褐色	粘土質シルト	
	III	10YR7/4　にぶい黄橙色	シルト質粘土	
	IV	10YR7/4　にぶい黄橙色	粘土質シルト	
SX1674	2a	10YR6/1　褐灰色	粘　土	灰白色火山灰を斑状に含む。
	3b	10YR6/1　褐灰色	粘　土	
	3c	10YR5/1　褐灰色	粘　土	マンガン粒を多量に含む。
	3d	10YR5/1　褐灰色	粘　土	明黄褐色粘土を少量含む。

第36図　第122次調査区平・断面図（1/100）



SB1795（南） A－A'

遺構名	層位	土色	土性	備考
	1a	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	黄橙色砂土粒を少量含む。
	1b	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	黄橙色粘土粒を少量含む。
	3	10YR3/3 暗褐色	粘 土	黄橙色粘土、白色粘土を含む。
	4a	10YR4/1 褐灰色	粘 土	白色粘土を多量に含む。
	4b	10YR7/3 にぶい黄橙色	粘 土	白色粘土、細砂粒を多量に含む。

SB1795（北） B－B'

遺構名	層位	土色	土性	備考
	1	10YR2/2 黒褐色	粘 土	柱痕跡
	2	10YR4/4 褐色	粘 土	灰黄褐色粘土を含む。
	3	10YR4/1 褐灰色	粘 土	白色粘土を多量に含む。
	4	10YR3/1 黒褐色	粘 土	下層に白色粘土を斑状に含む。
柱穴	1	10YR5/1 褐灰色	粘 土	白色粘土、酸化鉄を多量に含む。
	2	10YR3/2 黒褐色	粘 土	浅黄橙色粘土粒を斑状に含む。
	3	10YR6/1 褐灰色	粘 土	白色粘土を少量含む。

SK1816 C－C'

遺構名	層位	土色	土性	備考
	1	10YR3/2 黒褐色		黄褐色シルトをわずかに含む。
	2	10YR5/8 黄褐色		

SA1740 D－D'、E－E'

遺構名	層位	土色	土性	備考
	1a	10YR4/4 褐色	シルト質砂土	材抜跡
	1b	10YR6/3 にぶい黄橙色	シルト質粘土	
	2a	2.5Y3/3 黄褐色	粘土質シルト	暗褐色土を含む。
	2b	2.5Y4/2 暗灰黄色	シルト質粘土	黄褐色土を含む。
	3a	10YR3/2 黒褐色	砂土質シルト	黄褐色土を少量含む。
	3b	2.5Y5/4 黄褐色	粘土質シルト	黒褐色土を多量に含む。
	3c	2.5Y5/4 黄褐色	粘土質シルト	黒褐色土を少量に含む。

SK1822 F－F'

遺構名	層位	土色	土性	備考
	1	10YR6/6 明黄褐色	粘土質シルト	黄灰色粘土をブロック状に含む。
	2	10YR7/6 明黄褐色	粘 土	黒褐色粘土を多量に含む。
	3	10YR7/6 明黄褐色	粘土質シルト	
	4	10YR5/1 褐灰色	粘 土	
	5	10YR6/8 明黄褐色	粘 土	褐灰色粘土を少量含む。
	6	10YR4/1 褐灰色	粘 土	
	7	10YR3/1 黒褐色	粘 土	白色粘土を含む。

第37図　第122次調査遺構断面図（1/60）

考えられる。

SA1740 板塀は、第115次調査 D、E、G 区で検出された SA1700 一本柱列（塀跡）に取り付く建物跡のコーナー部分から延び門跡の両側を遮蔽するようになっていた。掘り方中の材痕跡は、板状を呈しているが210cm程の間隔をおいて明らかに角材の痕跡がある。平成７年度に実施した第107次調査の SA1620 板塀跡にも同様の角材痕跡があり、痕跡間の距離は224cmであった。これらのことから板塀には210～225cmの間隔をおいて、支柱状の柱が立てられていたと考えられる。なお板材の底部は、掘り方底面より18cmほど上方で止まっており、掘り方を一定程度埋め戻してから（註16）板材を立てたものと推定される。

調査区の西端で検出した SX1674 は、第115次調査 D 区において北辺が検出されており、南北20m 以上、東西７ m 以上、深さ0.5～0.8m となる規模の大きな遺構となった。第115次調査の時点においては、遺物の出土が少なく古代まで遡る遺構なのか不明ではあった。今回の調査によって第２層中から赤焼き土器片が出土し、直下の第３層には灰白色火山灰がきわめて顕著に堆積していることから、遺構の廃絶後に土砂が堆積したのは９世紀末から10世紀初め頃と考えられ（註17）、開削された年代は不明であるが古代まで遡ることが明らかとなった。

Ⅷ　第123次発掘調査

1．調　査　経　過

第123次調査は仙台市太白区郡山６丁目２―６佐藤善昭氏より、同住所において住宅の解体新築に伴う発掘届が、平成10年４月27日付けで提出された。住宅の基礎が遺構の検出面より深く、遺構を損なうため発掘調査を実施した。調査区は、住宅の建つ部分を対象に東西5.5m、南北3.5mの調査区を設定し、平成10年７月６日に表土排除を実施した。現況より深さ0.9～1.2mで遺構を検出し、調査は７月13日に終了した。

2．発見遺構・出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡１棟、溝跡１条、土坑３基、竪穴遺構１、ピットなどである。これらの遺構は第Ⅲ層上面で検出したが、ピットの中には上層から掘り込まれたものが含まれていた。

SB1780 掘立柱建物跡　東西２間以上（総長3.3m以上、柱間寸法180、150cm）で、東面に廂を有する建物跡と推定される。方向は東西柱列でE―1°―Nである。身舎の柱穴は62～68×65～70cmのほぼ隅丸正方形で、深さは25～30cm、柱痕跡は18～20cmの円形である。廂の柱穴は32×35cmのほぼ隅丸正方形で、深さは24cm程、柱痕跡は10cm程の円形と推定される。埋土は褐色あるいは暗褐色シルト、粘土質シルトである。

遺物は掘り方より、土師器坏片、甕片、須恵器坏片、壺片が少量出土している。

SD1783溝跡、SK1786土坑を切っている。

SD1783 溝跡　上幅30～100cm、底面幅10～90cm、深さ11～17cm、断面形は扁平な逆台形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向は蛇行し一定せず、検出した総長は3.5mである。堆積土は暗褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

遺物は、土師器坏、甕片が１点ずつ出土している。

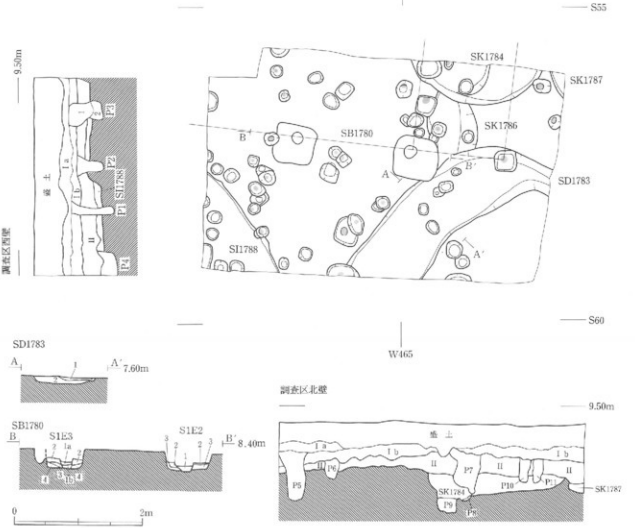
SB1780掘立柱建物跡に切られている。

SK1784 土坑　東西2.06m、南北0.55m以上の円形の土坑と推定され、深さは34cm程である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は西半がやや深くなっている。堆積土は暗褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

SK1786土坑を切っている。

SK1786 土坑　東西1.20m以上、南北0.80m以上の惰円形の土坑と推定され、深さは８～13cm程である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は灰黄褐色粘土などである。

第38図　第123次調査区位置図



西　壁					
遺構名	層位	土　色	土　性	備　考	
基本層位	Ⅰa	10YR4/4 褐色	シルト		
	Ⅰb	10YR3/3 暗褐色	シルト	礫土粒・炭化物を含む。	
	Ⅱ	10YR4/4 褐色	シルト		
SI1788	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄褐色土、暗褐色土をブロックで含む。炭化物を少量含む。	
Pit 1	1	10YR3/3 暗褐色	シルト		
Pit 2	1	10YR3/3 暗褐色	シルト		
Pit 3	1	10YR3/1 暗褐色	シルト		
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色土を含む。	
Pit 4	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色土をブロックで含む。	
SD1783	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄褐色シルトをブロックで含む。A～A'	
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色シルトをブロックで多く含む。	
SB1780　B－B'					
S1E3	Ⅰa	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	炭化物を少し含む。	
	Ⅰb	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	黄褐色土をブロックで多く含む。	
	2	10YR4/4 褐色	シルト	黄褐色土をブロックで、炭化物を少量含む。	
	3	10YR4/4 褐色	シルト	黄褐色土をブロックで多く含む。	
	4	10YR2/4 暗褐色	シルト	マンガン粒を含む。	
S1E2	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	マンガン粒と炭化物粒を含む。	
	2	10YR4/4 褐色	シルト	黄褐色土をブロックで、炭化物を少し含む。	
	3	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄褐色土をブロックで多く、マンガン粒を含む。	
北　壁					
Pit 5	1	10YR4/4 褐色	シルト	炭化物と礫土を多く含む。	
Pit 6	1	10YR4/4 褐色			
SK1784	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	マンガン粒を含む。下層に黄褐色土を小ブロックで含む。	
Pit 9	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト		
Pit 8	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	炭化物を少し含む。	
Pit 7	1	10YR3/2 黒褐色		炭化物を少し含む。	
Pit10	1	10YR3/3 黒褐色			
Pit11	1	10YR3/3 黒褐色			
SK1787	1	10YR3/3 黒褐色	シルト	黄褐色土を小ブロックで含む。	

第39図　第123次調査平・断面図（1/60）

遺物は、土師器甕片、不明な鉄製品が少量出土している。

SB1780 掘立柱建物跡、SD1783 溝跡、SK1784 土坑に切られている。

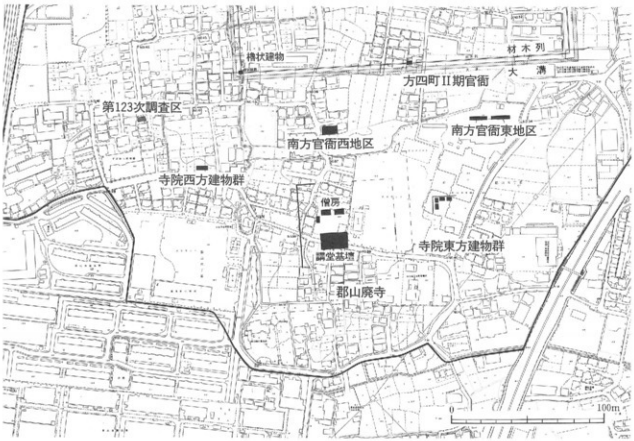
SK1787 土坑　東西0.24m 以上、南北0.37m 以上の土坑と推定され、深さは16cm程である。壁は直立気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

SI1788 竪穴遺構　調査区の南西隅で検出し、一辺4.0m 以上の竪穴遺構である。深さは11cm程であるが、平面形や規模は不明である。堆積土は暗褐色シルトである。

遺物は、土師器坏、甕片が少量出土している。

3．ま　と　め

調査を実施した地点は、方四町Ⅱ期官衙の西南コーナーより140m 程西に離れたところで、さらに同所は Ⅰ 期官衙の南辺となる塀跡の近くでもある。調査区が狭小であるため、敷地内での遺構の様相が全て明らかになったわけではないが、Ⅰ期官衙に関わる遺構は発見されなかった。建物跡の一部だけの検出であるが、方向からはⅡ期官衙の時期と推定される SB1780 掘立柱建物跡が検出された。柱穴の配置から廂付き建物となる可能性がある。第65次、第85次、第96次発掘調査（註18）などから、廂付建物や規模の大きな建物跡が方四町Ⅱ期官衙の外に存在することが明らかになりつつある。官衙内の主要な建物と同等の規模や構造をした建物が方四町Ⅱ期官衙の外に配置されているのである。今回の調査地点から発見された SB1780 掘立柱建物跡も、方四町Ⅱ期官衙の南前面に重要な機能を有した新たな官衙ブロックが広がっている可能性を考えることができる。その範囲や区画施設ならびにこれまで発見されている官衙ブロックとの関連などは明らかになっていない。これらについては周辺での調査成果の蓄積を行なって検討していきたい。



第40図　Ⅱ期官衙（南部）遺構配置図

IX　総　　括

今年度は第４次５カ年計画の第４年次目にあたり、主に７世紀末から８世紀初めにかけての方四町II期官衙の中枢部と郡山廃寺の範囲を明らかにする目的で発掘調査を実施した。また個人の住宅建設などに対応した「仙台平野の遺跡群」において、小規模な調査を実施した。

１．II期官衙の調査

(1)　方四町II期官衙中枢部について

昨年の調査では、第115次調査区から楼閣風の建物跡が、第116次調査区からは桁行12間で、総長33mに及ぶ建物跡が発見され、中枢部を構成する建物列の様相が明らかになってきた。今年度は建物列のさらに南での遺構の様相を把握するために発掘調査を実施した。昨年の第116次調査区の西列の南では、敷地に制約があり調査が実施できないため、対応する東列の部分で第121次調査を実施した。発掘調査した結果は空閑地となっており、さらに外郭となる材木列の部分にもとくに関連する遺構は検出されなかった。

方四町II期官衙中枢部の中で、創建期のII－A期の建物配置は第41図のようになる。遺構の検出状況が断片的であったり、外側の建物列の対称性を確認できにくい点などがあるが、宅地化した現状にあり、これ以上の調査は困難な状況にある。

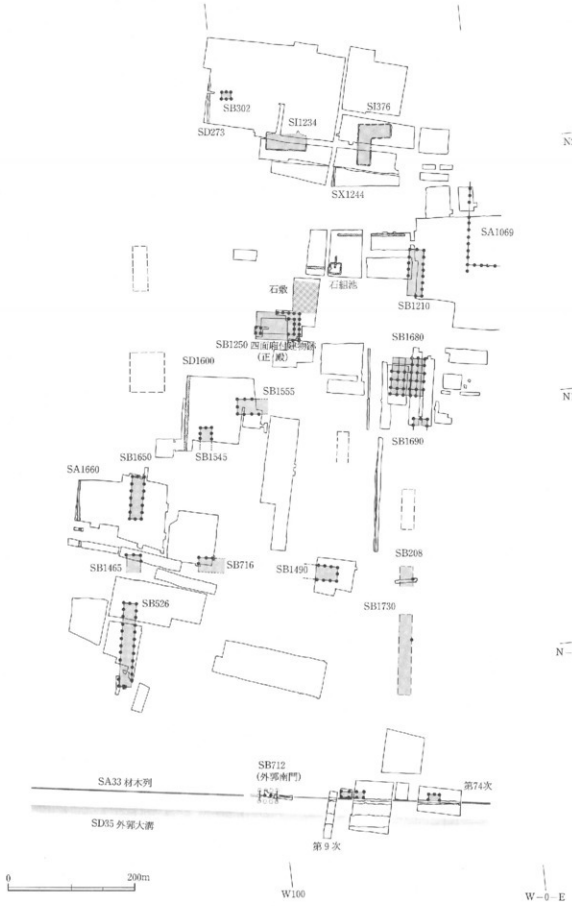
(2)　方四町II期官衙の外郭付近について

第121次調査区のSD35大溝からは、他の第７次、第43次調査区で遺物が多量に出土したことに比べて、極めて少なかった。第７次、第43次調査区は、方四町II期官衙の南西辺で、櫓状建物と材木塀によって厳重に遮蔽された外側に位置（註19）している。今回の第121次調査区は、方四町II期官衙南辺の中央に位置する門に近接し、土器類の投棄などについて官衙縁辺部と違う状況が反映しているのかもしれない。さらに、I期官衙との重複範囲の違いもある。第121次調査区はI期官衙の東辺である材木列（註20）より東に位置し、調査区内からI期官衙の遺構は発見されていない。第７次、第43次調査区は、I期官衙の南部に位置し、周辺に官衙を構成していた建物跡や竪穴住居などが広がっている。I期官衙関連の遺物が重複関係から入り込む余地が想定される。結論付けることは難しいが、今後とも遺物も含めた大溝の状況や、周辺の遺構との関連に注目していきたい。

第117次調査区では方四町II期官衙外郭の東辺となる材木列を検出した。その掘り方中からは、同調査区内のSX1768から出土している遺物と関連するものが出土している。その状況は外郭西辺部で出土した遺物と銅関連の

遺　跡　名	棟　方　向	構　造（総長m）	柱間寸法（cm）	建替え	柱抜き取り	備　　考
SB1250 建物跡（正殿跡）	東西棟　N　1°－E	桁行８間（17.4）、梁行５間（10.8） 四面廂付建物	桁行　身舎230　廂195～205 梁行　身舎200～225　廂205～235	なし	一部にあり	
SB1210 建物跡	南北棟　N　2°－E	桁行７間（18.3）、梁行２間（5.6）	桁行236～294　梁行280～282	なし	なし	主柱に密接した東柱痕跡有
SB1680 建物跡	南北棟　N－2°－E	桁行５間（14.8）、梁行５間（12.8）	桁行250～260　梁行260～270	なし	あり	底面に拳大の河原石
SB1690 建物跡	南北棟　E－2°－S	桁行１間（2.6）、梁行２間（5.4）				
SB208 建物跡	南北棟　（推定）	不明	不明	不明	なし	
SB1730 建物跡	南北棟　（推定）	不明	不明	不明	不明	柱穴１
SB1555 建物跡	東西棟　E－0°－S	桁行３間以上（8.76以上）、梁行２間（5.92）	桁行288～292　梁行292～300	なし	一部にあり	主柱に密接した東柱痕跡有
SB1545 建物跡	南北棟　N－0°　S	桁行３間以上（5.2以上）、梁行２間（4.56）	桁行204～228　梁行228	なし	一部にあり	
SB716 建物跡	東西棟　E－2°－S	桁行２間以上（5.35以上）、梁行１間以上（2.58以上）	桁行245～290　梁行258	あり	あり	
SB1490 建物跡	東西棟　E－3°　S	桁行４間以上（8.3以上）、桁行２間（5.3）	桁行245～267　梁行260～265	あり	あり	
SB1650 建物跡	南北棟　N－3°－E	桁行６間（16.62）、梁行２間（4.92）	桁行253～293　梁行220～272	なし	一部あり	一部柱痕跡底面に河原石有
SB1465 建物跡	南北棟　E－0°－S	桁行１間以上（２以上）、梁行２間（5.4）	桁行200以上　梁行270	なし	なし	
SB526 建物跡	南北棟　N－3°　E	桁行12間（33.8）、梁行２間（4.9）	桁行260～290　梁行245	あり	一部にあり	

表１　II-A期建物跡一覧表

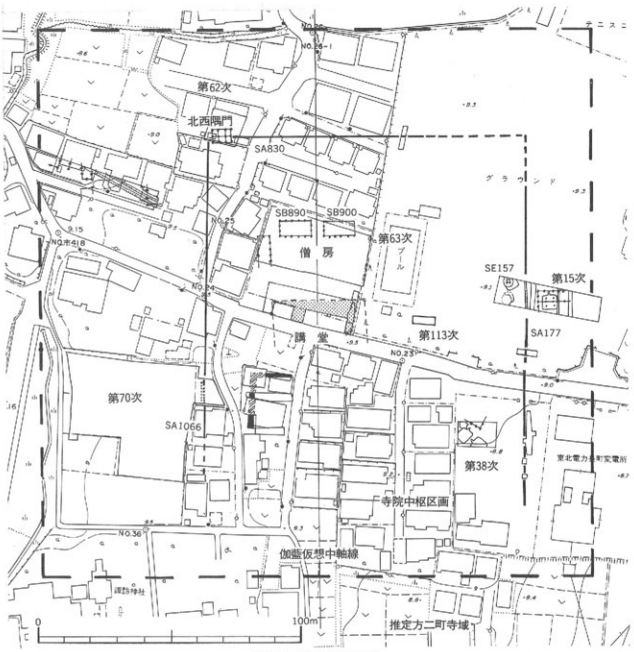


第41図　II期官衙中枢部主要遺構配置図（II-A期）

ものは含まれていないが、共通した特徴がある。昭和56年度に方四町Ⅱ期官衙南西コーナーより、約140mほど北の地点で第16次調査（註21）を実施した。そこからは外郭西辺となるSA138材木列、ならびに材木列を跨ぐように総柱のSB134建物跡が発見されている。SA138材木列の掘り方が拡がり、SB134建物跡の柱が立てられていることから、一連の遺構である。これらの遺構の掘り方より漆運搬用と考えられる須恵器（E－88）や羽口（P－4）、鉄滓、炭化物などが出土している。外郭西辺付近でも材木列の造営以前に鉄、漆に関わる作業を行なっていたと考えられる。このような作業をしながら材木列や周辺の建物を建築している可能性を指摘したい。

(3) SX1768について

SX1768は、周辺で鉄や銅、漆などに関わる作業が行なわれ、それにともなった廃棄物が投棄されたと考えられる。とくにその中で注目されるのは銅に関連した遺物である。赤色の付着物のあるトリベなどの他にも鉱滓としたものの中には、山口県美東町長登銅山跡で出土した「からみ（銅滓）」とされるもの（註22）にきわめて類似したものも



第42図　郡山廃寺全体図

含まれている。これら銅関連の遺構、遺物についての報告例は、奈良県明日香村飛鳥池遺跡や平城宮跡第222次調査一式部省東役所一、平城宮右京八条一坊十三・十四坪の調査、ならびに前述した長登銅山跡などで発見されている。今後、科学分析やこれらの遺跡から出土した遺物と比較検討していきたい。本遺跡の出土遺物がⅡ期官衙の造営時かそれ以前に遡ると考えられるため、7世紀代の銅関連遺物としてきわめて重要である。

なおここで注目したいのは本遺跡の昭和54年度調査(註23)である。この調査は郡山遺跡の発掘調査の先端となったものであるが、SX1768を検出した第117次調査区の南に隣接している。ここからは掘立柱建物跡や住居跡などの他に、焼土遺構が4基検出されている。規模は長軸長100～110cm、短軸長50～70cm、深さ10～20cmのU字形で、壁面が火熱を受けている。さらに遺構に伴っての出土ではないが、青銅製のツマミが出土している。また遺物の中には、砥石、漆の付着した土師器などがあり、今回発見した遺構、遺物と関連があることが想定される。

(4) 郡山廃寺について

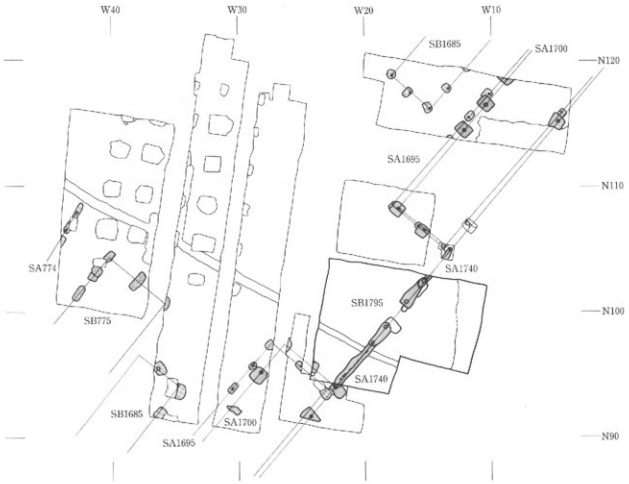
第119次、第120次調査によって、寺院の北辺と東辺となる小規模な材木列を検出した。この発見により寺院の範囲は東西約120m、南北約132m以上となり、これまで推定していた範囲より南に拡大する可能性が高くなった。南辺については来年度以降も追加調査をすることによって明らかにしていきたい。また第119次調査B区で検出した材木列の掘り方中の柱痕跡については、塀としての柱痕跡とは規模の点で区別されるものであり、門跡の存在を想定させる。この位置は寺院の区画の北東コーナーより約84m南に位置している。門とすると講堂基壇の南端から、東への延長上にあたっている。位置からは東門の存在や、北にある方四町Ⅱ期官衙との関係から東大門のような主要な門になる可能性を含んでいる。しかし敷地や地上施設による制約があるため、この地点での調査区の拡張は困難であり、遺構の全容を把握することはできなかった。来年度以降、寺域の南辺や南門跡の検出に努め、それらを通じてさらに検討していきたい。

2．Ⅰ期官衙の調査

第118次調査でⅠ期官衙の南部、第122次調査でⅠ期官衙の中枢部での調査を実施した。

第122次調査では、これまでの調査で板塀や一本柱列の塀跡によって区画される中枢部の短辺中央で門跡の検出を想定し、棟門と考えられるSB1795門跡を検出した。これまで中枢部の塀に付設された門は、全て通り間程度のもの(註24)で、それに比してはやや規模の大きいものである。しかし昭和58年に実施した第35次調査では、隣接するブロックの材木列上にSB438A・B門跡があり、四脚門であった(註25)。今回検出したSB1795門跡は、それより小規模なものであり、Ⅰ期官衙中枢部の主要な門跡と見るのは難しいであろう。ただし7世紀後半代における地方官衙の門を含めた内部構造については、類例が乏しく、明らかとはなっていない。今後中枢部の建物配置や隣接するブロックでの門の位置、規模、形態などを明らかにしながら検討していく。したがってⅠ期官衙の正面がどの方向(註26)になるのかについては、今年度の調査でも明らかにできなかった。

Ⅰ期官衙を構成する遺構は、Ⅰ期官衙中枢部と推定される周辺では、遺構の方向が真北から東に30～33°振れている。第118次調査区で発見されたSB1805掘立柱建物跡も、調査区が狭小であることと出土遺物が少ないため断定することは難しいが、Ⅰ期官衙内の南部を構成する遺構である可能性が高い。隣接する郡山遺跡第124次発掘調査(註27)でも、Ⅰ期官衙の建物跡2棟、柱列3列などが発見され、同様の規模の柱穴で構成された掘立柱建物跡が東に40～45°振れて存在していた。これらとともにⅠ期官衙内の建物となるものであろう。



第44図　第122次・第115次調査区Ⅰ期官衙遺構配置図

調査成果の普及と関連活動

1．広報・普及・協力活動

年 月 日	行 事 名 称	担当職員	主 催
10．4．24	展示室見学	長島	NHK カルチャーセンター
5．12	展示室見学	高橋	宮城教育大学付属中学校1年生
5．31	展示室見学	長島	仙台市富沢遺跡保存館友の会
6．10	展示室見学	高橋	仙台市立郡山中学校3年生
7．25	展示室見学	長島	NHK 泉カルチャーセンター
8．9	展示室見学	長島	仙台市中央市民センター
9．9	第121次調査区見学	高橋	仙台市立郡山中学校3年生
9．11	第121次調査区見学	高橋	仙台市立郡山中学校1年生
9．17	第121次調査区見学	高橋	仙台市立郡山中学校1年生
10．14	第121次調査区見学	長島	仙台市立中山中学校ふれあい学級
10．29	第121次調査区見学	長島	仙台市立沖野中学校社会学級
11．15	郡山まつり	長島	郡山コミュニティ市民委員会
11．19	郡山遺跡・西台畑遺跡	長島・高橋	仙台市教育委員会
	発掘調査報道発表	吉岡恭平・佐藤淳・森剛男	
		工藤信一郎・豊村幸宏	
11．21	郡山遺跡・西台畑遺跡	長島・高橋	仙台市教育委員会
	発掘調査現地説明会	吉岡恭平・佐藤淳・森剛男	
		工藤信一郎・豊村幸宏	
12．12	宮城県遺跡調査成果発表会	長島・高橋	宮城県史跡整備市町村協議会
11．2．20～21	第25回古代城柵官衙遺跡検討会	長島	古代城柵官衙遺跡検討会
2．28	展示室見学	長島	古田史学の会

2．調査指導委員会の開催

第27回　郡山遺跡調査指導委員会　平成11年3月19日　北庁舎5F第1会議室

○平成10年度の調査成果について

○平成11年度の調査計画について

3．資料の貸し出し・展示

仙台市博物館	常設展	「原始・古代・中世」
石巻文化センター	企画展	「古代の瓦－東北の役所と瓦屋根－」
横浜市歴史博物館	特別展	「兵（つわもの）の時代－古代末期の東国社会－」

4．展示室の入場者

平成10年4月～平成11年3月　　428名

註

註1　P15　写真参照

註2　第117次調査区からは、約280のピットが検出され、そのうち144から柱痕跡が検出された。

註3　季刊考古学第62号　古代・中世の嗣生産　P17　1998．4

註4　国立歴史民族博物館教授　今村峯雄氏の御教示をいただいた。記して感謝したい。

註5　福島県文化財調査報告書第192集「国道113号バイパス遺跡調査報告IV」1988「善光寺遺跡」　P159～172　P289　4型式とし670年から690年前後の年代を考えている。

註6　奈良国立文化財研究所　『年報　1998－III』　1998．3

註7　奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部　岡崎一郎氏の御教示をいただいた。記して感謝したい。

註8　郡山遺跡第124次調査－宅地造成に伴う事前調査－　第25回古代城柵官衙検討会資料　1999．2

註9　仙台市文化財調査報告書第215集　郡山遺跡XVIII－平成8年度発掘調査概報－　P36　1997．3

註10　仙台市文化財調査報告書第227集　郡山遺跡XIX－平成9年度発掘調査概報－　P30　1998．3

註11　註8に同じ。

註12　第22図　SD35・SD61断面参照

註13　仙台市文化財調査報告書第110集　郡山遺跡VIII－昭和62年度発掘調査概報－　P56～65　1988．3

註14　秋田県文化財調査報告書第289集「払田柵跡II－区画施設－」　P227、228　1999．3

註15　仙台市文化財調査報告書第227集　郡山遺跡XIX－平成9年度発掘調査概報－　P5～14、33～38　1998．3

註16　仙台市文化財調査報告書第210集　郡山遺跡XVI－平成7年度発掘調査概報－　P5　1996．3
第107次発掘調査SA1620板塀跡でも、同様のあり方を示している。

註17　宮城県多賀城跡調査研究所年報1991　『多賀城跡』　第61次調査　P95～140
註14に同じ。

註18　第65次調査　仙台市文化財調査報告書第156集　郡山遺跡－第65次発掘調査報告書－　1992．3
〔寺院東方建物群〕
四面廂付建物を含む掘立柱建物跡、塀跡、竪穴住居跡で構成され、外側が溝で区画されている。3小期にわたる建て替えがある。
小規模な建物が多く、多量の遺物が出土している。官人の居宅の空間と推定している。
〔南方官衙東地区〕
南北2間、東西10間の長大な建物2棟を中心に構成されている。
第85次調査　仙台市文化財調査報告書第145集　郡山遺跡－第84次・85次発掘調査報告書－　1990．6
〔南方官衙西地区〕
正殿より規模の大きい四面廂付建物跡（東西19.6m、南北10.97m）が1棟発見されている。
第96次調査　仙台市文化財調査報告書第169集　郡山遺跡XIII－平成4年度発掘調査概報－　1993．3
第100次調査　仙台市文化財調査報告書第178集　郡山遺跡XIV－平成5年度発掘調査概報－　1994．3
〔寺院西方建物群〕
総柱や床束を有する建物など倉庫ふうの建物が、材木列で区画されている。II期官衙の倉庫院と考えられる。

註19　第7次調査　仙台市文化財調査報告書第29集　郡山遺跡I　－昭和55年度発掘調査概報－　1981．3
第43次調査　仙台市文化財調査報告書第74集　郡山遺跡V　－昭和59年度発掘調査概報－　1985．3

註20　第48次調査　仙台市文化財調査報告書第74集　郡山遺跡V　－昭和59年度発掘調査概報－　1985．3

註21　第16次調査　仙台市文化財調査報告書第38集　郡山遺跡II　－昭和56年度発掘調査概報－　1982．3

註22　文化庁編　『発掘された日本列島　'98新発見考古速報』　P48　1998．6

註23　昭和54年度調査　仙台市文化財調査報告書第23集　年報I　1980．3

註24　第51次調査　仙台市文化財調査報告書第86集　郡山遺跡VI　－昭和60年度発掘調査概報－　1986．3
第77次調査　仙台市文化財調査報告書第124集　郡山遺跡IX　－昭和63年度発掘調査概報－　1989．3
第83次調査　仙台市文化財調査報告書第133集　郡山遺跡X　－平成元年度発掘調査概報－　1990．3
第107次調査　仙台市文化財調査報告書第210集　郡山遺跡XVI－平成7年度発掘調査概報－　1996．3

註25　第35次調査　仙台市文化財調査報告書第58集　郡山遺跡Ⅳ　－昭和58年度発掘調査概報－　1982．3

註26　Ⅰ期官衙の造営基準方向については、これまで「真北から30°～33°ほど東に偏している」としてきたが、以前より桑原滋郎氏から「真北から60°ほど西に偏している」とする指摘がある。

石松好雄・桑原滋郎　『大宰府と多賀城』　岩波書店　1985．3

林譲作編　『図説発掘が語る日本史　1　北海道・東北編』　新人物往来社　1986

監修・坪井清足／平野邦雄　『新版　古代の日本　第九巻東北・北海道』　角川書店　1992．8

多賀城市史編纂委員会　『多賀城市　第1巻』　1997．3

註27　註8に同じ。

参考文献

伊東信雄先生追悼『考古学古代史論攷』　「南東北における歴史時代の須恵器編年Ⅰ」木本元治　1990．11

吉川弘文館　『季刊考古学第57号　いま、見えてきた中世の鉄』　1996．11

清文堂　『宮城の研究1　考古学篇』　1984．12

古代の土器研究会編『古代の土器5－1、2　7世紀の土器』　1997、1998

文化庁文化財保護部監修『月刊文化財』　11　平成6年　№374

文化庁文化財保護部監修『月刊文化財』　10　平成10年　№421

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所学報第46冊　平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』1989

奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集刊行会『文化財論叢Ⅱ』　「平城宮の火床炉」小池伸彦　1995．9

奈良国立文化財研究所飛鳥資料館　『飛鳥の工房』　1992．10

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部　『飛鳥・藤原宮発掘調査概報　22』　1992．5

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部　『－1300年前の首都－これが藤原京だ』　1995．3

奈良国立文化財研究所　『年報　1998－Ⅱ』　1998．3

山口県美東町文化財調査報告第5集　『長登銅山跡Ⅱ』　1993

美東町教育委員会　『解説　長登銅山跡』　1995．3

横浜市歴史博物館　『兵の時代－古代末期の東国社会－』　1998．10

宮城県文化財調査報告書第95集　『宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書(昭和57年度分)』　1983．3

宮城県文化財調査報告書第100集　『宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書(昭和58年度分)』　1984．3

宮城県文化財調査報告書第116集　『硯沢・大沢窯跡ほか－仙台－松島道路建設関係遺跡調査報告書－』　1987．3

涌谷町教育委員会　『宮城県遠田郡涌谷町小里長根窯跡群調査報告書』　1971

多賀城市文化財調査報告書第17集　『柏木遺跡Ⅱ』　1989．3

仙台市文化財調査報告書第23集「年報1」　『郡山遺跡発掘調査概報』　1980．3

仙台市文化財調査報告書第29集　『郡山遺跡Ⅰ』　1981．3

仙台市文化財調査報告書第38集　『郡山遺跡Ⅱ』　1982．3

仙台市文化財調査報告書第42集　『郡山遺跡－第13次－』　1982．3

仙台市文化財調査報告書第46集　『郡山遺跡Ⅲ』　1983．3

仙台市文化財調査報告書第64集　『郡山遺跡Ⅳ』　1984．3

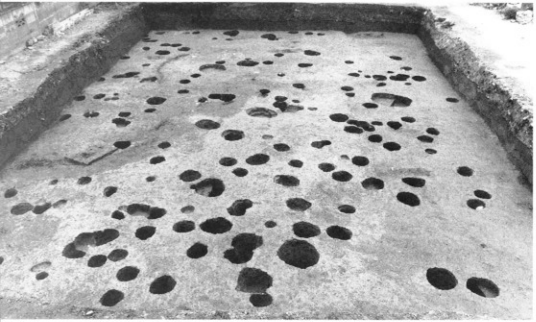
仙台市文化財調査報告書第74集　『郡山遺跡Ⅴ』　1985．3

仙台市文化財調査報告書第86集　『郡山遺跡Ⅵ』　1986．3

仙台市文化財調査報告書第96集	「郡山遺跡Ⅶ」	1987．3
仙台市文化財調査報告書第110集	「郡山遺跡Ⅷ」	1988．3
仙台市文化財調査報告書第124集	「郡山遺跡Ⅸ」	1989．3
仙台市文化財調査報告書第133集	「郡山遺跡Ⅹ」	1990．3
仙台市文化財調査報告書第145集	「郡山遺跡－第84・85次－」	1990．6
仙台市文化財調査報告書第146集	「郡山遺跡ⅩⅠ」	1991．3
仙台市文化財パンフレット第10集	「郡山遺跡」	1985．10
仙台市文化財パンフレット第18集	「郡山遺跡」	1989．12
仙台市文化財調査報告書第156集	「郡山遺跡－第65次発掘調査報告書－」	1992．3
仙台市文化財調査報告書第161集	「郡山遺跡ⅩⅡ」	1992．3
仙台市文化財調査報告書第169集	「郡山遺跡ⅩⅢ」	1993．3
仙台市文化財調査報告書第178集	「郡山遺跡ⅩⅣ」	1994．3
仙台市文化財調査報告書第194集	「郡山遺跡ⅩⅤ」	1995．3
仙台市文化財調査報告書第210集	「郡山遺跡ⅩⅥ」	1996．3
仙台市文化財調査報告書第215集	「郡山遺跡ⅩⅦ」	1997．3
仙台市文化財調査報告書第222集	「郡山遺跡－第112次－」	1997．3
仙台市文化財パンフレット第40集	「発掘ノ郡山－郡山遺跡に埋もれた歴史を掘る－」	1997．10
仙台市文化財調査報告書第227集	「郡山遺跡ⅩⅧ」	1998．3
古代城柵官衙検討会	第17回古代城柵官衙検討会資料	1991．2

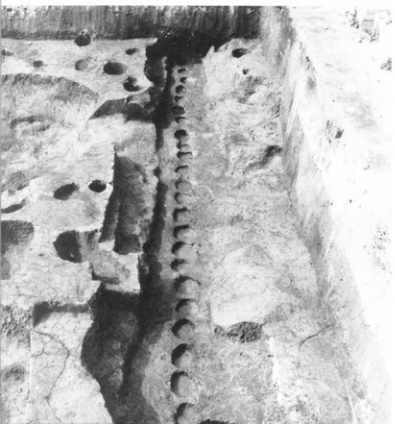
写　真　図　版

図版１　郡山遺跡航空写真



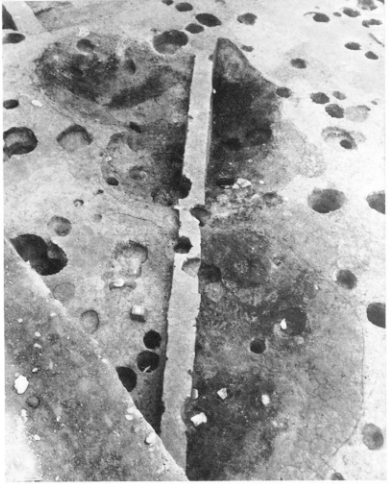
図版 2
第117次調査区
ピット郡全景（西より）

図版 3
第117次調査区
SD1773 全景（西より）



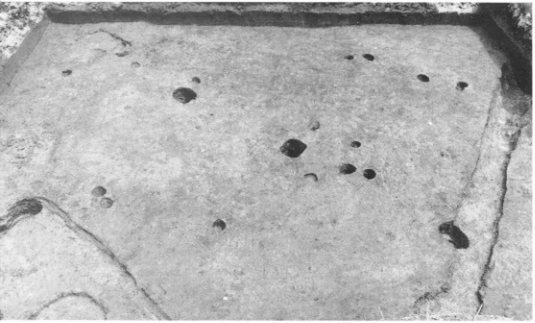
図版 4
第117次調査区
SA1770
Ⅱ期官衙外郭材木列（南より）

図版 5
第117次調査区
SX1768 土坑
（北西より）



図版 6
第117次調査区
SX1768 土坑
（北より）

図版 7
第117次調査区
東半部全景
（南より）

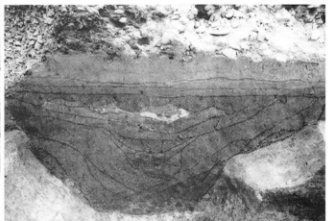


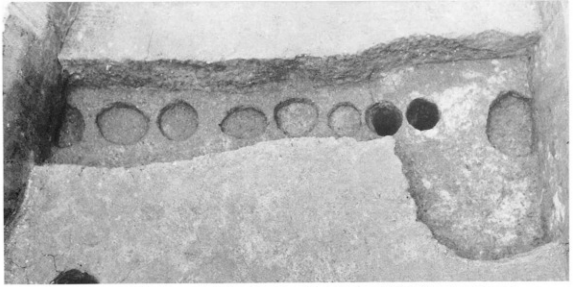
図版 8
第118 次調査区
全景（南より）

図版 9
第119 次調査区
A区（北東より）

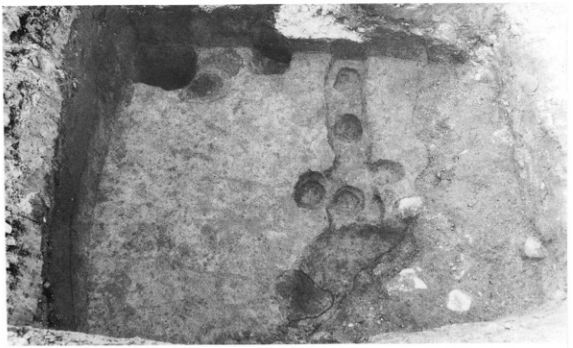
図版 10
第119 次調査区
B区（西より）

図版 11　第119 次調査B区
SD142 溝跡断面（北より）





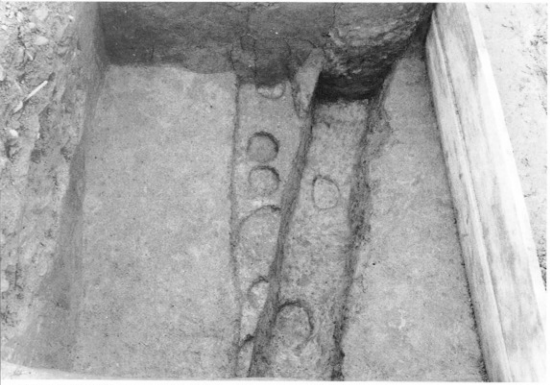
図版 12
第119 次調査B区
SA177 材木列
（西より）



図版 13
第120 次調査C区
SA1785 材木列
（南より）

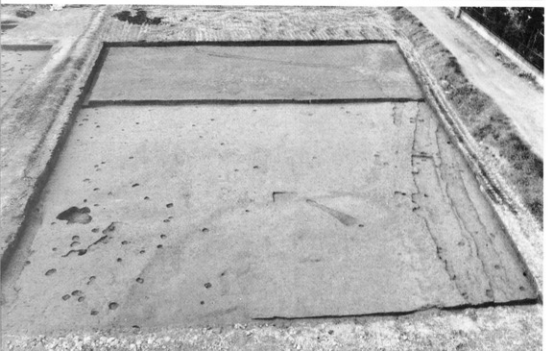
図版 14 （左）
第120 次調査区
全景（南より）

図版15 （右）
第120 次調査区
全景（北より）



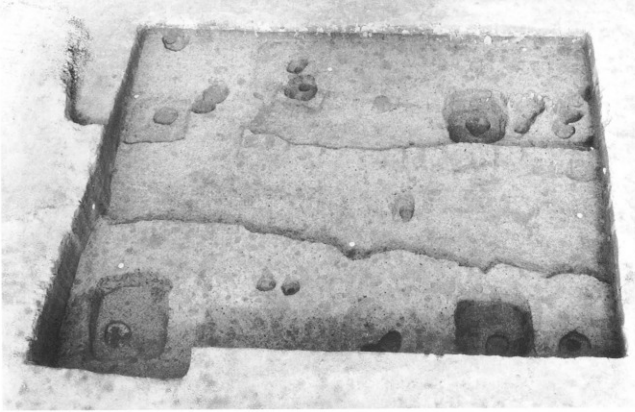
図版16
第120次調査A区
SA1785材木列（南より）

図版17
第121次調査区
SD35・SA33
（東より）



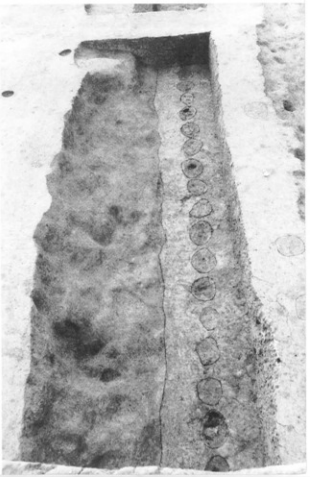
図版18
第121次調査B区
全景（東より）

図版 19
第121 次調査C区
全景 SB1790 東半
（南より）

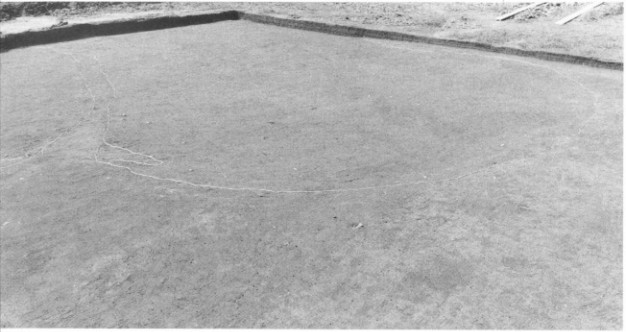


図版 20
第121 次調査A区
SD35・SD61 断面
（西より）

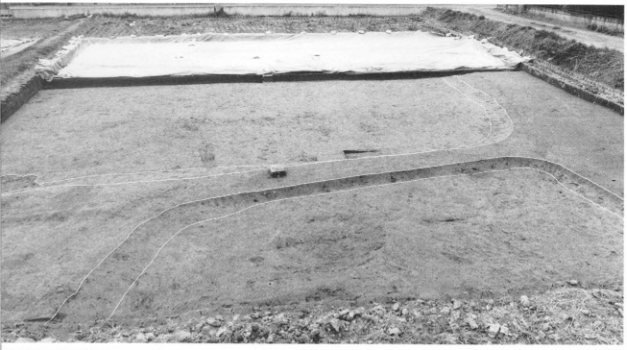
図版 21
第121 次調査A区
SA33 材木列
（東より）



図版 22
第121 次調査A区
SA33 材木列
断面（東より）

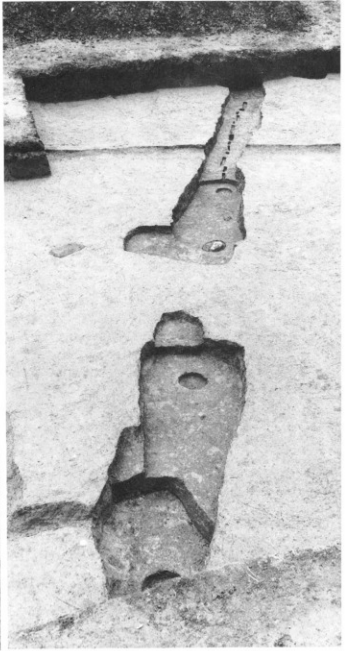


図版 23
第121 次調査A区
Ⅲb層水田跡
（北より）



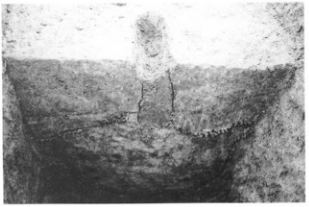
図版 24
第121 次調査B区
Ⅲb層水田跡
（東より）

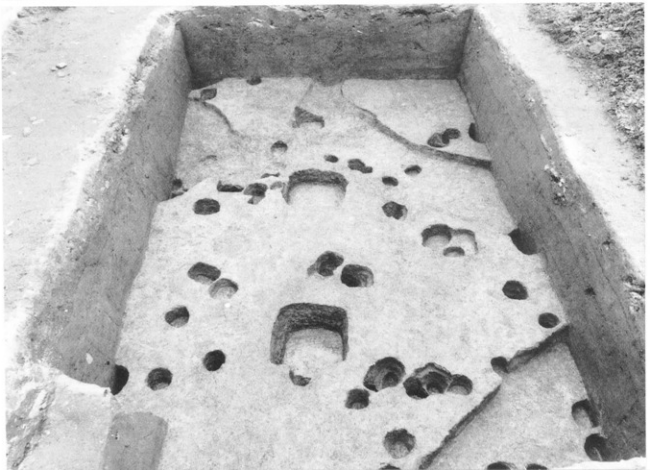
図版 25
第122 次調査区
全景、東半
（北より）



図版 26
第122 次調査区
SA1740 板塀跡
SB1795 門跡
（北より）

図版 27　第122 次調査区
SA1740 板塀跡断面（北より）





図版 28
第123 次調査区
全景
（西より）

1

2

3

4

5

6

7

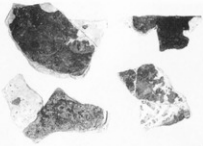
8

9

10

11

12



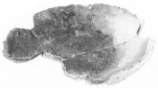
13

14

15

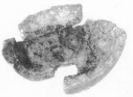
1	C-810	坏	SX1768	9	C-824	壺	SX1768-SK1769
2	C-818	坏	SX1768	10	C-812	壺	SX1768
3	C-819	坏	SX1768	11	E-406	高台付坏	SX1768-SA1770
4	C-821	高坏	SX1768	12	E-415	蓋	SD1773
5	C-850	高坏	SX1768	13	C-823	壺	SA1770
6	C-809	高坏	SX1768	14	E-405	壺	SX1768
7	C-822	甕	SX1768-SK1769	15	E-412	壺	SX1768
8	C-811	甕	SX1768-SK1769				

図版29　第117次出土遺物（1）



1a

2



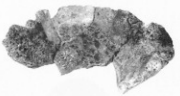
3

1b

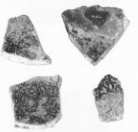
4

5

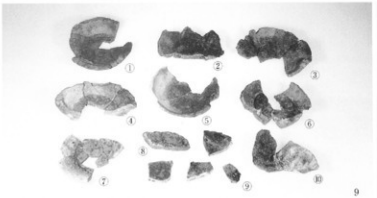
6



7



8



9

10

11

12

13

14

15

1a	C-841	环	SX1768	9①	C-841	⑨	C-848		
1b	C-841	环	SX1768	②	C-846	⑩	C-842		
2	C-839	トリベ	SX1768	③	C-847	10	P-40	羽口	SX1768
3	C-843	鬼	SX1768	④	C-845	11	P-41	羽口	SX1768
4	C-844	鬼	SX1768-SA1770	⑤	C-841	12	P-36	羽口	SA1770
5	C-845	鬼	SX1768	⑥	C-844	13	P-37	羽口	SX1768
6	C-846	鬼	SX1768	⑦	C-839	14	P-38	羽口	SX1768
7	C-847	トリベ	SX1768	⑧	C-840	15	P-39	羽口	SX1768

図版30　第117次出土遺物（2）

1

2

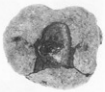
3

4

5

6

7



8

9

10

11

12

13

14

15

16

1	P-42	羽口	SX1768	(第117次)	9	N-61	皇宋通宝	Pit.1	(第117次)
2	P-43	羽口	SX1768	〃	10	D-53	碗	SD142	(第119次)
3	P-44	羽口	SX1768	〃	11	D-51	高台付坏	Ⅲ層上面	〃
4	P-45	羽口	SX1768	〃	12	D-52	高台付坏	Ⅲ層	〃
5	K-230	礪	SD35	(第121次)	13	C-826	坏	SD35	(第121次)
6	K-229	礪	SX1768	(第117次)	14	C-829	坏	SD35	〃
7	N-88	刀子	SD1773	〃	15	C-832	坏	SD35	〃
8	N-91	銙跡現	遺検	〃	16	C-825	坏	SK1797·Ⅳ層上面	〃

図版31　第117次・第119次・第121次出土遺物

報告書抄録

ふりがな	こおりやまいせき
書名	郡山遺跡
副書名	平成10年度発掘調査概報
巻次	XIX
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第234集
編著者名	木村浩二、長島榮一、高橋綾子
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671　宮城県仙台市青葉区国分町三丁目７－１　TEL 022-214-8893～8894
発行年月日	1999年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
こおりやまいせき 郡山遺跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 たいはくくこおりやまさんちょうめほか 太白区郡山三丁目他	04100	01003	38° 13′ 13″	141° 18′ 30″	19980416 ～19981218	1,160m²	重要遺跡の範囲確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
郡山遺跡	官衙跡	縄文～奈良	掘立柱建物跡・材木列・板塀列・溝跡・土坑・水田跡	弥生土器・土師器・須恵器・瓦土製品・石製品・鉱滓類・自然遺物	

仙台市文化財調査報告書第234集

郡山遺跡 XIV

－平成10年度発掘調査概報－

1999年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目7－1
文化財課 022(214)8893

印刷　株式会社 東北プリント
仙台市青葉区立町24－24
TEL 263-1166